



Imanu'el

Atlas' Inferno

月 熄

Studio
***46

*The LORD gave,
and the LORD hath taken away,
blessed be the name of the LORD.*

目次

インマヌエル -魔-	1
●開幕	
謡 月埋み火	4
寂 File.G	6
†序†	10
	14
	18
	23
†破†	28
	33
	37
	42
†急†	47
	52
	57
	62
●結	
c l o s e . G	68
†オマケ†	73
† Information †	75

インマヌエル -魔-

ヒトにはそれぞれの十字架がある。己の命という業を捨てて、その十字架を背負える者だけが、天の使徒たりえると言う。

人の世は罪に満ちている。無償の平穏など存在しないというのに、目の前の落とし穴を誰もが見ない。転んだ者の手を取るだけでも上々で、ヒトは知らずに誰かに足をかける。奪う意識もなく他者の働きを求めて、自身の尊重と正当さを当然とする。

あからさまな罪を犯す悪魔と、罪など自覚したくないヒト。わかっていても抗えない者、世とは罪人の溜まり場と言える。

悪魔に馴染む彼が初めて見た時、その天の翼を持った稀有な竜は、不思議なほどに穢れがなかった。月の徴という魔性^{しるし}を持つのに、誰より淡々と使命に務める長姫がいた。

彼女が魔物となったことに無理はなかった。背負った運命に己を捧げて、彼女の心は空虚だった。だから不意に魔物へと変えられた時、最早欠乏だらけの天使の姿が、彼女と気付くことができなかった。

——なんで…… こんな——……。

哀しげに目を閉じている黒い十字架。その首を拾った時から、彼の長い祈りは始まる。亡者達——水の底でのたうち回る者達へ。

-spin a tale-

月 うず み 火

Imanu'el
_Inferno
Studio
***46



●開幕

謡 月埋み火

一時の仮死状態の間に、竜の墓場なる所へ行った。そう、翼の悪魔に付きまとう竜人崩れが話し始めた。

遙か昔に宝の剣に封じられた竜らしい山科^{やましの}燕雨^{つばめ}は、今では和服に黒デニムの下衣を合わせる謎な金髪精霊として生きている。それでも竜の墓場に行ってきたのだという。「墓場の番人が、何でかシアにそっくりで、本質は月の鬼竜だと言ってた。北の聖地で育てられて、竜の墓場に隠されてたって」

月とは魔道においては、世の聖火を自らの魔力に変え得る特性を言う。そうした奪う性が直接発現されると、熱の吸収の力となる。

地味でも悪用されると困る性質が「月」で、それは生き物の熱、命を搾取することが可能だからだ。特に竜とは自然の脅威で、「力」の及ぶ範囲を拡大にできる化け物であるため、同じく「月」を司る古の龍神^{いにしえ}が、月の鬼竜^{わがわい}という禍の芽を隠し切った。鬼竜自身は素直な性根で、世に溢れる悪意に染まらず、青女^{せいじょ}たる龍神が望む通りに墓場の番人となることを受け入れたのだ。

「んで……その鬼竜と、オレがそっくり？」

吸血鬼である翼の悪魔。共通点は鬼の一字。

「そう。しかも、シアが隠して預かる天使の羽を、『シオンの翼』だと言ってた。それは月の青女が最後に遺した、世界の希望だって」

仰々しい話になってきたが、力を観る眼となる黒い首輪をつける燕雨は、生来故障した五感を持っている。その目で語る番人の話が、「十三夜の月」を象徴とする吸血鬼だから、蒼冷める悪魔の目にありありと浮かんでくる。

人間界でいうピラミッドに似た四角錐の形の遺跡が、北の聖地の奥には存在している。人間界のゲームにおけるダンジョンそのものの迷宮が待っているので、北の城に住んだ時がある翼の悪魔は近付かなかった。それなのにうっすらと、月明かりの差し込む中枢の様が、青闇の硬い髪の間で視界を占拠し始めた。

「シオンの翼……どんな化け物でも、一人は止められる星^{さえず}の囀^{つひ}り……竟の音の卵……？」

誰かが細くて白い手で、白い翼に守られる卵を持った。ヒトの両手に収まる大きさで、光の六芒星が滲む真っ白な卵殻。

命の灰で作られる脆い身体^{こころ}の吸血鬼には、学生シャツの奥にある心臓は飾りだ。しかし何か翼の悪魔の胸を揺らして、まるで体が全て脈打つように白い光景に侵されていく。

——これを使わずに済んで、本当に良かった。オマエには私の名をやろう、ルーナ。とてもいい子に育ってくれて、感謝しているよ。

鬼と呼ばれた異端の竜に、その翼は用意をされた。無愛想でも慈愛を持った月の青女は、禍になり得る鬼の竜や、古代の遺産な機械の人形、また禁忌の猫神も拾って暮らしていた。

これは卵の記憶だろうか。どうして現在、北の遺跡のことなど知らない吸血鬼に、鬼竜を撫でる青女の姿が見えるのだろう。

あんな風に、笑い合いたい。そんな憧憬が拙い心臓に打ち寄せていた。淋しい音の波が痛みに変じかけた瞬間、翼の悪魔を揺さぶる刺激で現実に戻った。

「大丈夫か、シア」

燕雨が話す橘診療所に戻ってきた。炎獄に通じる北に行こう、と言うので、まず詳細を聴いている中で、意識が遠のいていた。

「あ、ごめん……何か、何でか、月の青女が観えてた、今」

え。燕雨が長椅子の隣でぼかん、とする。

「アンタも見たの？ シオンの翼の卵、青女が孵^{かえ}すはずだったのに、その前にミサキの奴に言われて闇に還った。それが俺にも視えて」

「え……ってそれ、何の話？」

翼の悪魔が今見た光景は、卵が外の世界を想っただけだ。しかし燕雨の蒼の目には更にその先、卵の行く末の夢が映った。どちらにも過去が見えただけでもおかしい状態なのに、微妙にずれた情報を二人で受け取っている。

ミサキとは、燕雨に「心眼」という特殊な力を遷す首輪を渡した子供だ。召喚なしに世に出られないはずの、竜の墓場に隠れる生者。

「これは……ほんとに、何かあるね……？」

そして二人は、北の聖地に行くことを決める。

寂 File.G

遠い昔に、月の鬼火と、極夜という強い水と風まで、単身で制御できる竜がいた。北の聖地の核心、「月の翼」という遺跡の前で、長くさまよう彼を拾った風の死竜が話し始めた。

「僕は単に、魔物になればあのヒトに会えたら、と思っただけなんだけどね。こんな時代まで自分が残ったことは、正直驚きだったよ」

死竜とは、何かの手段を得ることで意識を世に残し続ける、魔物手前の竜種と言える。特に風竜や地竜の類は、風や大地など普遍の自然を糧とできるために、上手くいけば不老不死に近い長命者も出現し得る。

竜種は根が理性的であるため、芯から魔物になる者は稀らしい。人世の事物にそこまで執着することも少なく、風の死竜はただただ、早逝した連れ合いを想っていただけ。看取りもできずに、その後魔物となった相手と再会もできなかった、その悔いだけがかった。「魔道なんてさっぱり解らなかつたし、竜の墓場や黄泉や混沌、そんな理も知らなかつた。ヒトから風に返ってあのヒトを探し続けたら、墓場の出入りを繰り返したり、逆鱗が勝手に悪魔になってたり。それだけの馬鹿な話なんだよ」

内部は迷宮という北の遺跡で、入口の横で座り込む死竜。そうした未練がましい姿は、さまよえる彼には自身が重なって仕方ない。

自然の脅威がヒト型をとるのが、竜人と呼ばれる滅びた化け物。竜の寿命は、ヒト型を維持する竜の目によって決まる。ヒト型で居続ければ竜の目は損耗していくが、意識を保つだけならかなり長い期間を耐えて、悪魔の逆鱗という補助があれば尚更となる。

それでも風の死竜も、ずっと同じ心で世にあるわけではなかった。少し前からほとんど原型と近い姿で召喚——具現された理由は、本人にもよくわからないという。「召喚者の王子は確かに僕の子孫だし、類稀な悪魔使いなのもわかる。世の風としてただ漂っていた僕を、まとめ直したのはあの子だ」

そんな風の死竜が迷子の彼を拾った。彼は彼で、いつからどうしているのかも謎だ。

ある天の翼を持った吸血鬼に、風の死竜は現在宿っている。吸血鬼と竜人崩れがこの度、炎獄^{ゲヘナ}という時空の場末に行くことになった。彼も風の死竜も本体は炎獄に在ったために、訪れた二人に取引を持ちかけた結果になる。

「この体も奇縁だ。風竜の血をひく子孫で、魔として造り直された吸血鬼がいるなんてね。僕が適合できることも驚きだけど、烙斗^{らくと}君は烙斗君で、起源は何かの異端のようなのに氷の竜に適合できる。余程長い時間をかけて、竜になろうとしてきたんだね？」

取引は、吸血鬼と竜人崩れが炎獄に入る間に現世の二人の体を借りる。代償として二人の調べ事を彼らがこなしておくことだった。

炎獄に入った生き物はどんな状態であれ、幽鬼という、実体と霊体の間の存在になる。それなら実体を消耗するリスクを侵さずに、人世に肉体を置いていくことも方法の一つ。それでこうして、旅の外套を纏った吸血鬼の体を使う風の死竜と、付き添いである彼が北の遺跡で悩んでいるのが現在になる。

この遺跡は、風の死竜がいた数千年前から存在している。最終的には古の超科学文明を調べる龍神の研究者が、数多の遺産を置いて封印していた。一步入れば、二度と陽の目は見れない迷宮として有名で、今ではそこまで凶悪な場所ではないというが、重要な中枢は隠され続けている。

この遺跡にあったはずの、「シオンの翼」について調べてくれ。それが吸血鬼と竜人崩れの青年の条件だ。どう入れば調べ事ができる程度の深部に行けるか、生前は魔道の知識に詳しかった彼が解析しているものの、彼には彼の目的がある。風の死竜もそれは同じで、どちらも束の間、死に損ない達の牢獄である炎獄から現世に出られたばかりだ。このまま吸血鬼達に成り代わることも不可能ではなく、律儀に遺跡の調査などをしないで、何処かへ逃げて自由になればいい。そんな悪魔の誘惑がないとは決して言えない。

だからそうした、不秩序の芽である彼らの元に、その追手の天使は降り立っていた。「その体から出て、すぐ炎獄へ戻りなさい。今度こそ完全な死者として葬られたいの？ セヴァ・ルペルクス・アニラ」

あまりに遠い過去の真名を、澱み一つなく風の死竜は読み上げられる。遺跡の頂点から風に乗せてその声を落とした相手は、黒くて長いツインテールの娘で、風の死竜より幽冥の死者である彼に心当たりがあった。

のぼんとしてまま、風の死竜が立って、顕れた炎獄の追手に受け答えをする。「やあ、漣^{さざなみ} 汐^{しお}ノ香^{のか}ちゃん。それとも白夜^{はくや}かな。わざわざ現世まで出張、御苦労様だよ」
にこにこ空に向かって、借りた吸血鬼の体で手を振る。娘の眉間に険しい皺^{しわ}がよる。「あ、何で記憶が消えてないの、って顔だね。残念だけど、君の『忘却』は通じないように対策済だよ、白夜」

その天使の娘が使う人形の体は、漣汐ノ香という竜種の末裔のために、さまよう死者になる前の彼が造った依代だ。妹分だった天使の汐ノ香のための人形を、今では「忘却」の「力」を司る神威が奪っている。この天使の娘を取引相手の吸血鬼達は探しているので、何故炎獄にいった二人の方でなく、こちらに出て来るのか、とこっそり落胆する。「今までは君に記憶を奪われて、僕はただの火の池の風でしかなかった。そのお返しに、この吸血鬼をもらうくらい安いものでしょ」

問答無用で、冷気を伴う風の刃が、遺跡の前面から滑り来るよう叩きつけられた。

「わあ。雪の天使って前情報なのに、風竜に風をぶつけるって、短気過ぎないかな？」

この風の死竜は、悪魔の逆鱗に支えられる闇の化生でありつつ、光の力への耐性を持つ。天使という化け物の本来の主力は光なので、光以外も使える娘が追手として来たのだろう。しかしてその実態は、娘が光を使わない真の理由は、風の死竜が使う吸血鬼の体が娘には大事な相手だからだ。

「僕には通じなくても、光はこの体を消してしまえるからね。君の力は不利だよ、白夜。君がこの吸血鬼を、傷付けられない限りね」

風の死竜の記憶を奪い、自我を停止させる方策が使えないなら、この天使一人で彼らを連れ戻すことはできない。勿論この点だけで娘が引き下がるとは到底思えず、吸血鬼の体で風の死竜は、濃霧の防壁を周囲に巡らせた。風と水を合わせた「力」も使えるこの体が、やはり便利で合っていて助かる。

「さて、どう出る気かな……白夜ちゃん」

白夜のような由緒正しい神威にとって、己の神通、「意味」が効かない者は天敵となる。まずこの吸血鬼自体が難攻なので、誰か援護者を連れてきているはず、と彼らは睨む。

その見立ては正しかった。遺跡の入口の場に突然、光の混じる水矢が襲いかかってきた。

霧で視界が悪かったことと、吸血鬼の体を傷付けないようにあえて水矢は外されていた。それでも目晦ましの霧を全て打ち払う程には強い力で、矢を放った者を遠目に確認して、彼は風の死竜と共に大きくため息をついた。

「ああ……まあ。僕でもそうするよ、うん」

遺跡の頂点にいるままの娘と、別に現れた助っ人の少女。遺跡を囲む森の中から、その大きな鎌を手にする黒い髪の少女は、人形の天使と同じいたいけな姿で歩み出てきた。「仮にも竜と神威の血を引いた巫女が、無傷で昏睡になっているなら。守り手がなければ、それはおいしく体を使わせてもらおうよね？ 特にその子は、現代に残る竜珠の使い手だ」

^{たちばなとうか}
橘 桃花、と。大鎌を持った少女に対して、死者である彼から苦い思いで情報が伝わる。風の死竜は状況を整理して把握する。

「今の名称は^{うつぎねこは}捻 猫羽、かな。どちらにしても、体はさざなみの手に堕ちたか。誰か橘診療所に、裏切者がいるかな……それはともかく、こちらもその体は傷付け難いし、困ったね？」

こうなると彼らには、最早活路は一つしかなかった。入口に陣取っていて正解だった、と吸血鬼の手に強い霊力を流す。

遺跡を包む結界の扉が開いた。頂点の娘や大鎌の少女が何を言う間もないまま、吸血鬼の体を借りる風の死竜は、迷宮と名高い北の遺跡の内部へ逃げ込んだのだった。

北の聖地の核である遺跡は、本来外壁の上に天使の娘のように昇り、天へ帰る足がかりにするのが正しい。結界に介入してまで迷宮に入る愚か者は、現代の探究者にも少ない。

その結界がまず、遭難者を出さないために張られている。そんな遺跡に逃げ込んだ彼らは、入ったばかりなのにもう迷宮のどこかに飛ばされ、たはは、と苦く笑った。

「噂通り、月だけは見えるんだね、ここは」

すぐ周囲は身長の上二倍程の隔壁で、上方は空洞なので壁に登ることもできる。天上側を見上げてみると、頂上らしき中心に天窓の光。頂点にいた娘の姿はなく、単純にそこが外壁の頂点と同じではないことを示している。

迷宮そのものを見渡すように、迷路の隔壁の上を渡れば、端の壁まで出ることは誰でもできる。問題は外壁が強固で壊せないこと、端についても何処にも目に見える扉がないので、外には出られないことなどだ。

しかしこんな所に入った者の、考え自体は似たり寄ったりで。隔壁の上に登ると、同じ発想でまず迷路全体を見渡そうとした者と、風の死竜は遠目に会うことになる。

「.....あれ。君、炎獄に行ったはずじゃ？」

隔壁の上縁を歩き、首輪を隠す襟巻をひらひらさせる和風の影があった。天上に飛んでもいつまでも届かず、四隅にも行って見た、という竜人崩れの青年がそこにいたのだった。

取引でその二人の体を借りた後だったので、吸血鬼と従者の竜人崩れの青年は、意識だけの幽鬼状態で炎獄に行ったはずだ。死者の彼には仲間の養子にあたる山科燕雨は、羽織を外套に一人で遺跡の内にいる理由を語る。

「炎獄に入ってからすぐ、この遺跡が同じようにあったから、俺が遺跡を、シアは周囲を探ることにしたんだ。入ってみたらこの通りで、出られなくなったからうろうろしてた」

「わー。想像以上に考え無しだね、君達？」

それではどうやら、現世の遺跡と炎獄内の遺跡が、時空を絡めて混在している。そんな一時的な時空の交差を起こして、運命に介入するのが炎獄の「さざなみ」の十八番。

炎獄とはそもそも、数多の時空から困った化け物をまとめて追放するためのごみ溜め。その牢獄を管理するのが、さざなみと名乗る暗黒の天使だ。様々な時空で有り得る運命の姿を、さざなみの天使は観ていると言われる。

「でも、アンタ.....何で、その姿なんだ？」

だから炎獄の影響が混ざってくると、風の死竜が借りる吸血鬼の体が、そのまま吸血鬼の姿で山科燕雨には観えていない。そもそもここにいるのが取引相手の風の死竜と、燕雨が判別できているのが凄い。それを言うなら実際、目の前の相手は本当に山科燕雨だろうか。

さてさて、ここからどうしたものか。迷宮の壁の上に座り、またも考え込む時間だった。

十序十

持久力には非常に乏しい。そうみなすしかない竜人崩れの相方を、迷宮の遺跡内に避難させて正解だった。十を超えた魔性の屍達を周囲に、翼の悪魔の吸血鬼は返り血を拭^{ぬぐ}った。

本来、吸血鬼のいた宝の世界は、魔界より棲むのは大変だった。魔界には太陽が上らず、魔性の者の拠点とされることに比べて、毎日天上の聖火が降る宝の世界。管理する天使も、魔界の住人が現れないか目を光らせていて、吸血鬼は何度も魔界に追い返されかけた。

「体の枷がない炎獄のオレに、力で勝てると思ってんの？」

炎獄という地獄の底が、「力」の理においてどういった場所かを吸血鬼は知らない。ただ、宝の世界よりは聖火による消耗がなく、常に貧血を訴えていた体が軽い。門番風の憐れな下っ端が何人襲い来ようと、戦闘不能にすることはたやすかった。

竜人崩れの相方は逆に、自然の気が少ない所なのですぐにバテるだろう。今の吸血鬼にも魔力がないので、戦い易いわけではないが、消耗を引きずる実体がないのがこうも楽とは。

「幽鬼って結構、勝手がいいのかな……宝珠の力をわりにストレートに使えるね、これ」

吸血鬼はその宝を、ある天使の傍で守ってきた。ここにもその天使を探しに来たのだ。

吸血鬼が守るべき黒い宝珠は、宝の世界の「力」を集めるフィルターとも言える。背中で吸血鬼の羽の核である角錐の石がそうで、珠の形でないのに宝珠と呼ぶのは、原初の世で完全な「力」だった頃は丸かったらしい。

神々とその血をひく天上人^{てんじょうびと}が、宝の世界を太古に見つけた。ヒトが住める環境であり、穢^{けが}れの無い小さな世界は宝箱として、人間の祖先となる地上人が天上人の英知と共に放流された。「力」——神の神秘に守られ、飢えも災害も疾病もない世界は、理想の世になると期待されていたのに、宝の世界は人間界より高度な科学文明を育てる。やがては「力」の庇護を自ら否定し、滅ぼされることになる。

「まあ、そうだよな。結局、人間界の方が、色々娯楽があって面白いからね」

炎獄に不法侵入した吸血鬼と相方に対して、どうやら最初の迎撃隊は一段落したらしい。鬼でも魔でも、無闇に殺生をするのは吸血鬼の趣味ではないので、宝の世界と似て見える小島の森に隠れた。相方はこの小島の中央にある聖地の遺跡に行かせたので、迷宮の内に囚われてそうそう出て来られないだろう。

黒の珠には、宝の世界で貯められた「力」が豊富にある。吸血鬼と相方がどれくらいの間、炎獄に留まることになるかがわからないので、無駄使いも控えなければいけない。

何のために、ここに。それは今でも思うが。
 「燕雨なら汐ノ香を探せるかもしれない、か。真に受けたわけじゃないけど、縁者に出会いやすいって意味なら、オレにもまだ会いたいヒトはいたしね」

炎獄と呼ばれる地獄の谷底は、宝の世界を昏く映す魔界の果てだ。宝の世界で北の小島に茂る木とは、およそ違う毒々しい赤い葉がなる森の最奥。吸血鬼はやっと、感じ続けていたおかしい気配の源を見つけた。

「.....意外に、びっくり。会える気は、何となくしてたけどさ.....」

まるで吸血鬼のことを待っていたように、大きな幹に気だるげにもたれる人影。吸血鬼の中で何かが、音を立てて軋きしんだ気がした。

「よっ。いつになったら汐ノ香を探しに来るのか、さすがに待ちくたびれたぜ」

「.....何で.....ラクト、に一ちゃん」

それを驚いている己に、吸血鬼は動揺している。可能性としては最も高い、地獄の底で出会える相手だとわかっていた。それなのにこうして、実際に死者に出会ってしまうこと。何より吸血鬼が自身で看取ったはずの、人世での生き方を鍛えてくれた師の存在が、全く変わらない形でそこにあった。

最後の時に、吸血鬼の相方を助けて、竜の墓場にいる子供——ミサキの手で灰の火酒にされた竜牙烙人たつきラクト。紫苑の髪に蒼い目を持つ男が、旅人の風情で大人の顔で笑っていた。

炎獄の奈落に相方と入る前に、旧知の人間の国の王子が現れて、吸血鬼と相方と取引をした。炎獄に行く吸血鬼と相方の体を預かり、王子が召喚した風の竜と、契約者を宿させてほしいとのこと。炎と風の国の力を継ぐ王子は相方の妹の幼馴染で、悪魔の竜を助けてほしいと頼まれた、と言った。

「その『契約者』が、オレ。燕雨も気付いてなかったけど、オマエに宿る風竜の気配は、もう覚えたみたいだぜ、アイツ」

「オレの体に風竜が宿ってるの？ 何で？」

「なんでもオマエの血の源流、セイザー家が風竜の遠い子孫なんだと。ディアルスの王家から分かれた風竜の男がセイザーらしいぜ」

王子の出自たるディアルス王家とは、水と風と火の竜人の血を継ぐ人間の複雑な家系だ。最も古い血は水の竜人で、その後に火と風が入って、風の傍系が市井に下ったと。まさかそんな古い縁故があるとは吸血鬼も知らず、宝の世界の狭さを思い知らされる。

「じゃあ、燕雨の体にはラクトに一ちゃんが憑いたってこと？ それなら何で、こっちにいるのさ？」

「オレも未だに、ここと地上の在り方がよくわかんねーんだ。多分、一時的にさざなみが荒れたら、何でもアリになるんじゃないの」

それは違う、と思うが、吸血鬼にも否定の材料はない。胡散臭い思いで師を見つめる。

「っつーか、何で遺跡の方、次元移動できるオマエが入らなかったんだよ。迷宮から燕雨の奴、出れなくなったらどーするんだよ」

「兄ちゃんこそ、見た目はラクトに一ちゃんだけど、本当に一ちゃん？　あまりに生前そのまま過ぎて、かなり怪しいんだけど」

昔に死神バイトをしていたために、吸血鬼には現状がどれだけ異状であるかがわかる。死の否定は、運命への介入の中でもかなりの禁忌とされる。体を失っただけなら「死」と呼ばない場合もあるが、烙人は確かに寿命が迫っていた。その限界を覆^{くつがえ}して意識を保とうとすれば、魔物や「神」の使徒になるしか、手近な方法はない。天使も使徒の一つなのだ。

「その答は、風竜の奴に反則技を伝授された、としか言いようがねーかな。アイツも炎獄の力を借りてるくせに、暗黒の天使には今でもならずに残る、ニセさざなみって話だから」

「ニセ、さざなみ……」

「でもオマエの言う通り、意識は完全に烙人とは言えねーかも。何かオレにも、前世とかでの宿縁があるっぽくて、そっち側にかなり力を持ってかれてる」

宝の世界での一般的な旅人姿。全身を覆う外套の中から、慣れた武器を師に取り出した。普段は小さな携帯キーホルダーに擬態させているが、これを武器に戻せる力の余裕もない、などとシビアな現実を吸血鬼に伝える。

「つまり、に一ちゃんは役立たず、と」

「だからオマエを待ってたんだろーが。さて、やっとうこうして、汐ノ香のために再会できたわけなんだから。それじゃこれから、天使を殺しにいこうぜ？」

それはとても師らしい、あっさりした口調。なのに何やら、戦いを好まない師にしては、随分不穏なことを言われた。今まで露払いをしたのはほとんど魔性の化生で、正直な話、いくら手にかけても文句の出ない相手だ。

しかし天使を殺しに行く、とは。吸血鬼が長年探している相手も天使で、どう考えても平和的な解決の発想ではない。

「汐ノ香のため、って…… どういうことさ？」

「汐ノ香、水の竜人の血を持ってることは、オマエも知ってたっけ？」

「うん。だから天使になってから芽が出て、黒の守護者になれたって話だったし」

吸血鬼が持っている黒の宝珠。世界中の水の力を司るその宝は、吸血鬼を魔界に返そうと追い続けた天使が守護の役目を引き受けた。

雪という形で、水の力を具現していた天使。何故か吸血鬼に対して愛着を持ってしまった天使は、宝の封印者となる「鍵」に吸血鬼を指定し、二人で黒の宝珠を守るようになった。山科燕雨と出会ったことで吸血鬼が殺され、天使が自らの翼を代償に吸血鬼を助けて、世からいなくなってしまうまでは。

「雪ってさ、風の花とか風雪とも言うだろ。オレが契約した風竜の力を汐ノ香もひいてる可能性があって、北の遺跡にそのさざなみがいそうで、天使を殺して竜を奪うって感じ？」

それは吸血鬼も相方に聞かされた発端だ。だからあえて、北の島に立っている城の奈落から炎獄に入った。その天使の翼が北の聖地にいた、古の化生のものという話を知って。吸血鬼がかつて探しても見つけられなかった雪の天使は、天でなく竜の血を持つ相方には出会えるかもしれない、ここに来たのだ。

「ラクトに一ちゃんは、竜じゃないじゃん。オレと条件は同じなのに、どうやって汐ノ香……と同じ力を持つ竜人を、探せるのさ」

そしてどうして、天使を殺すなどという話になるのだろうか。自身で先程言った通り、烙人としての意識——記憶があやふやであるような師も、小首を傾げる始末だった。「でもオレも、竜は探さねーとダメなんだよ。桃花も竜の血筋だから、汐ノ香が見つければ、近くにいる気がするんだよな」

あとオレ、氷竜は使えたぜ、とにこやかに加えた。たった今思い出したことらしい。「氷竜と風雪、ちょっとは近い気がしねえ？」

「……それしかないよね。燕雨には本命の、遺跡の中を探してもらってるわけだし」

師が嬉しそうに笑った。この顔を見れた、それだけでいいか、と吸血鬼は思いかけた。

桃花、と師が口にした名前。名しか吸血鬼は知らないが、昔吸血鬼を使役した悪魔使い、楡猫羽の憑く体の主になる。猫羽は相方の妹で、雪の天使が猫羽を桃花の体から消そうとした事変が先日あった。その話を聴いたことで、吸血鬼と相方は炎獄に入った。

桃花がもしも見つかった場合、猫羽の体はどうなるのだろう。猫羽を助けるために死を選んだときいたほどの相手が橘桃花なので、まさか蘇るつもりはないだろうが、それなら師は想い人の桃花を探してどうしたいのか。

「橘桃花に会えたら——成仏するの？」

むしろ死んでも会えていないのか。そこが不憫になってしまう。

暗い森の中を歩き始めた師は、こんな炎獄などに残り続ける理由を、自らも不思議そうにする。それは「己の目に見える師」だからだろう。炎獄にいたことができるさざなみの素因を、何か持つはずの師の本質にはきっと会えていない。隣にいるのは吸血鬼が思いを浮かべて、吸血鬼のことを懐かしんでくれる師の末練と言える。

「ミサキに会った時から……解ってたけど」

猫羽が悪魔使いの縁で召喚したのが、炎獄の風の翼を預かる竜の子供だった。師と共に、吸血鬼の相方を助けてくれた竜の子供は、雪の天使は自分にも友達、と言った。この縁が何処に向かうか、誰一人も知らなくても。

＊

炎獄に幽鬼として潜入している間、人世に残った体を貸してほしい。そんな取引を実際どう実行するのかを山科燕雨が尋ねた時に、人間の国で竜人の血をひく王子は言った。――先に風竜達を憑けてから奈落に入れば、こちらでは君達の体で彼らが這い上がるから。

その時確かに、誰がどの体を使うかまでは追及していなかった。そうして吸血鬼の体を借りているはずの風の死竜は、燕雨が見た事のない顔であてもなく迷宮を共に歩いている。

「本当に僕に協力してくれるのかい？　僕は君を、竜の墓場に閉じ込めようとしたのに」

白い静かな短髪で青い目の風竜に、確かに会った。燕雨が束の間迷い込んだ竜の墓場で、風竜は墓場に居続ける者を連れていこうとして来た。ついでに何故か燕雨を閉じ込めようとして、殺意は無かったが謎の泉に沈められた。

その件で風竜の気配を覚えていた燕雨は、墓場に現れたのとは違う姿に不信を感じる。「俺はどの道、この遺跡の中を探す気だから。アンタが風の竜なら、俺が探すのも風竜かもしれない奴だから、見つけやすくなりそう」

だから行動を共にしている。白い髪は同じだが尖っており、白い目で知らない顔の相手に。

吸血鬼の体には変化の能力があるために、風の死竜の現状を反映しているのだと言う。しかし何故か、燕雨の神経には引っかかる姿。

先程から何度も、衛兵のような幻が迷路の内で襲いかかってきた。風竜は幻だと言うが、斬り合うと互いに血が出て体力が落ちる。

北の聖地にあるこの遺跡は強い水の領域であるため、風竜には限られた力しか使えないらしい。それがさざなみの追手から燕雨達を隠しているが、衛兵達は遺跡自体の防御機構が再現されているので結界が通用しない、と。

「かつてこの遺跡に風竜の娘が来たはず、か。僕には子供が二人いてね。どちらも強い風を持ってたけど、竜宮を出る自由があったのは長男の家系かな。でも僕以外も本家の風竜がいたし、まあ僕の子が結局本家を継いだけど、風の珠自体は墓場の番人にも扱えたんだよ」

要するに、風竜とはかなり幅の広い竜人を指し得るということ。雪の天使が持っていた竜の血は水だが、雪という自然現象は風の竜にも扱えるとのことだった。

雪の天使が持っていた羽は、シオンの翼というこの遺跡由来のもの。その翼を得られた可能性のある風竜の娘について教えてくれたのは、かつてこの遺跡に來た親友になる。「ここに來たフウカっていう竜人は、風の珠は持ってなさそうだけど、竜宮に一度歸った時に、竜宮が魔竜で滅茶苦茶になってたから、絶望してここに歸って來たってきいた。でももう一度竜宮に行こうとして、この遺跡にいたシオンの翼の主の、フェズっていう奴と外に出たって」

魔竜ちゃんか、と風の死竜は、まるで酷く馴染みのある相手のように呼ぶ。「竜宮を荒した魔竜なら、初代か二代目だね。どちらの時代にも、この遺跡はあった。でも月の青女がここを研究所としたのは、初代が現れた後のはずだ」

何でも遺跡をこんな迷宮化したのも、月の青女と呼ばれた龍神だという。龍神は、自然の具現たる竜人とは違って体がヒトであり、天上の系譜であるため不滅の神の意を持つ。

また衛兵もどきが現れてきた。燕雨がその都度剣を抜いて相手をするが、水の地だから体力がもつだけで疲労感^{はなは}は甚だしい。水だけでない月の遺跡におそらく力を吸われている。

「僕は元々、この体を借りる条件が、遺跡を調べる事だからね。君を手伝うのは取引の内だけど、僕の望みを君は本当に理解してる？」

「.....ここにいるのはアンタの本体で、夢を見てるアンタが別にいて、その夢を終わりにさせたくない、って話だろ」

「そう。黄昏の泡、とあの子は言ったかな。君をここに長く居させることが、その方法の要になる。だから僕が本当に君に、まっすぐ協力をすると思ってるかい？」

竜人とはおおむね、実直な雑種よろしく、単純な公正さを是とする。しかし己が欲望に正直であるのも自然の竜人で、特にこの相手の言葉は含みだらけである気配がわかる。

そんな話は既に燕雨も、夢を続けるという取引相手の王子に確かめていた内容だった。「アンタが俺を炎獄に居させたいのは、墓場の時点でわかってるし。俺は暇だし、現実の体が死なないように王子がするはずだろ」

「.....」

「シアが生きてたら俺はいいし。ここに長くいたら俺が死ぬのはわかってるけど、アンタがシアの体にいる以上、俺が今守るべきは、アンタでしかない」

これ以上単純な話はないのに、風の死竜は難しい顔になった。存外に敏い、と燕雨も思う。

この迷宮を出ることができなければ、燕雨も吸血鬼の体も死ぬ。そういった現状の話。「.....とりあえず、夜が來て月が出ないと、この遺跡は起動しないんだよ。今は侵入者に反応してるだけで、それも炎獄だけに残った大昔の機能に過ぎない」

「.....炎獄で、朝とか夜って、來るのか？」

燕雨は炎獄とやらに入るのが二度目だが、いずれの時も、ぼんやりと明かりのある室内にいるような周囲の光だった。長い時間いたわけではないので、あの光に変化があるかは何も知らない。

「それが多分、来ないんだよね。だから僕は墓場に行って、夜の女神を連れ出そうとした」

燕雨が墓場に行った時に、風の死竜が頭れ狙っていた相手。え、と燕雨は息を呑み込む。

燕雨が墓場に行った時点では、この遺跡に燕雨達が来ることは発想もなかった。しかし風の死竜は既に、この遺跡に入り込む意志があったということになる。

「何しろここは、月を冠する遺跡だからね。僕が探し続けてきたのは、月夜の竜人だから。ここでなら会える——そうでも思わないと、僕にはもう他にあてがない」

「.....——」

「まあ彼女とこの遺跡には、同じ月以外には縁はない。夢の中にいる彼女も、僕を憶えていなくて。彼女は一度死んでるからか、その後に不滅の『神』になってるのに、僕の存在はなかったことになってしまってる」

竜の墓場には、風の死竜が言う夜の女神の他に、女神に付き添う黒狼がいるといった。それが風竜の連れ合いだった女性で、「神」となった月夜の竜の残滓らしいが、黒狼は風の死竜を憶えていないのだ。

「死んだら会える、って普通思うだろう？　僕の場合は、体が滅んでからが悲劇だよ」

「.....それはまあ、うん」

「まあすれ違い婚だったし、彼女には僕より重要な相手が沢山いたから。初めは番人相手に抵抗したけど、僕の伝える竜珠が変わってからは、諦めて眠ってたつもりだった。でも誰かが、僕を起こしたんだ。僕もどうしてここに僕がいるのか、今でもわからないんだよ」

風の死竜として目が覚めたからには、死竜の未練を遂げるしかない。半ば投げやりではあるが、強い未練であることは伝わる。

「アンタのことだけが、その月夜からは記憶が抜けてる？」

「多分そうだね。墓場で夜の女神を再現するほど、彼女は生前の記憶を持っているから」

「それ、誰かが記憶を奪ったんじゃないのか。俺達が探してる天使は、『白夜』っていう忘却の神に憑かれてて、そういう記憶を奪う化け物って、結構いるみたいなんだけど」

「白夜」ね、と風の死竜は天井を見上げた。遺跡の中心にある天窓から見える空は、まだぼんやりと薄明かりが続いている。

「『白夜』は長い歴史の中、集めた記憶を何度か手放しているはずだ。それでも彼女は一度も、僕を思い出したことはないよ」

「そうなのか。手放したけど、月夜がアンタに会う前にまた回収した、とかはなさそう？」

「有り得なくはないけど、そこまで『白夜』が僕の記憶に、拘る理由がなさそうだけど」

「白夜」と「月夜」は、同じ夜の名前でもあまり縁がない「神」らしい。「白夜」は当初、「月夜」の妹の竜人を依り代にして生まれ、その前に「月夜」は初代魔竜の力となった。当時の魔竜が後の「夜の女神」で、「月夜」の妹の力を持つため「月夜」と一緒にいるが、「白夜」は後付けで余所者でしかない、と。

そこまで大昔の話を聞いた燕雨は、思わずすぐにツッコミを入れてしまった。
 「それ、滅茶苦茶縁があるだろ。『白夜』って、周りにいる相手から記憶を喰うってきいた」
 「そうは言っても、竜宮で生まれたての時には、そこまでではない『神』だったけど？」
 風の死竜も同じ時代の竜なので、当時にはかなり魔竜周辺を調べたという。そもそもその「神」が「白夜」として生まれたのは、月夜の竜人と魔竜が墓場に去った後なのだ。

「.....『白夜』自身に、月夜の記憶を奪ったことがあるか、きいたことは？」
 「それはないかな。漣汐ノ香に憑いてるって知ったのも、つい最近のことだからね」
 燕雨としては、それ以外に月夜の「神」の不自然な記憶の理由が思い付かない。時期が合わないおかしさがあっても、このままでは風の死竜が憐れに思う。
 子が二人いた、と風の死竜は言った。実際の夫婦仲がどうだったのかはわからないが、月夜の側が「忘れたい」程嫌悪を抱いていたなら、さすがに風竜にも伝わるだろう。それなら逆に、永い時を往く「神」に風竜の記憶だけがないのは、重要なことの気がしていた。

「.....月夜と、夜の女神.....か.....」
 何かが沢山、燕雨の故障した五感に警告を訴えてくる。墓場でちらりとだけ見た女神は、本当に「夜」だったのだろうか、と。
 結局、この遺跡を夜にして起動する方法はあるのか。燕雨が改めて問うと、ないことはないが、古来の罫や他種の仕掛けも発動するようになる可能性が高い、と返ってきた。
 「さっき、橘桃花が外で襲ってきたからね。彼女の名は夜の女神の『力』に近くて、何か関係があるはずなんだ。彼女がここにきたら、炎獄に突然夜が映される可能性はある」

「橘.....桃花」
 話すことは、嘘ではない。しかし他にある切り札が隠されている。そもそも燕雨には母に近い名が出る不審を、今は口には出さない。
 「炎獄は本来、赤い荒野だ。この遺跡付近が人間界と同じ光景なのは、聖地だからだよ」
 つまり聖地の「力」を反映しているので、大きな「力」が別に現れたらそちらの意味も環境に加わる。雨の燕雨と風の死竜がここにいる程度では、上層を隠すように段々周囲に霧が立ってきた程度の変化になる。
 「これ、もっと霧が深くなったら、夜に月が出ても見えなくなるか？」
 「その時は風で散らす。君の雨は弱そうだし」

燕雨のように、己と他者がごっちゃになる故障した感覚ほどではないが、風の死竜にも「風が知ることなら伝わってくる」広範囲の情報収集が可能だと観えた。
 とりあえずは互いの特技を生かして、このまま遺跡の散策を続けるしかなさそうだった。

＊

聖地の森の奥で師に出会ってから、吸血鬼が遺跡のある広場側に帰ると、吸血鬼と師を思わぬさざなみの相手が待ち受けていた。

「忘却」の「力」を古来より持ち、自身を封じた漣汐ノ香の依り代を奪った「白夜」だ。「何、変な顔をしてるの。漣汐ノ香に会いに、貴男はこの炎獄にまた来たのでしょ？」

師もぼかんとしている横で、吸血鬼は顔が固まって言葉も出せなかった。確かに吸血鬼はこの人形を探しに何度もここに来たのに、その時には欠片も見つからなかった相手。

だから今回、違う一手として相方を連れて来たのに、人形は吸血鬼に真顔で告げた。「残念だけど、汐ノ香はもうこの依り代にはいない。楡猫羽が連れていったの。貴男達がここに来るより前に」

人形は手の平を上向きに差し出すと、その掌上に紅い針金細工のような、形のない紋が浮かび上がった。逆鱗、と師が口にする。

「私はこれをもらって、汐ノ香を手放したの。元々相性が良くなかったし、汐ノ香は地上で、ヒトとなることを望んでるから」

浮かんだ紋を、人形が握って手中に収める。それと同時に、黒かった人形の長い髪が紅く変わっていった。最早その人形は、黒い力の持ち主と決別したことを示すように。

「.....地上で、ヒトとなること？」

事態がわからず、オウム返ししかできない吸血鬼とは裏腹に、隣の師が厳しい目付きになって紅い髪の人形を凝視していた。

「それは——桃花の逆鱗じゃないのか」

元々その天使の人形は、師が造ったもの。紅い紋様を取り込み、今までの黒髪とは違う毛先を巻いた紅い髪となった。人形が彼らの前に現れた理由も含めて、師の声色が低い。「あんたにはひとまず、竜種の逆鱗があった方がいいってことか。汐ノ香は何処かで手に入れてた黒い逆鱗と共に消えて、あんたにはそっちが与えられた。そう言いたいんだろ」

なるほど、と吸血鬼は、全くよく解らないままだが、起きている現状だけは掴めてきた。

橘桃花というのは、楡猫羽が依り代にした人間だった。しかし逆鱗という紅い紋の力、竜人の巫女の素因だけを持って生まれた。

吸血鬼と師が同じ場で炎獄に揃ったために、二人共に縁のある相手が現れた現状。これが本当に、吸血鬼の属する世界の者とは断言ができない。楡猫羽が橘桃花の体を出て昏睡となり、目覚めなかった別の世界も存在するといふのだから、人形の言葉を全て真に受けるわけにはいかなかった。

人形は二つ括りだった髪を下ろして、風に揺らす。そのまま大人びた気配で口を開いた。

「……アナタが言う橘桃花は、誰のこと？　竜牙烙人。水門管理者として、消え残る氷竜」

へ。師の出自を、霧の泉の精霊だと捉える吸血鬼は、やはり状況がわからずに口を塞ぐ。

師は表情を抑えた蒼い目で人形を見返し、吸血鬼には一瞬、その目が何故か紫に見えた。その方が本来在るべき姿、というかのように。

「桃花は桃花だろ。でも、そうだな……もしその逆鱗自体が桃花だっていうなら、オレが桃花と呼んだ相手は、逆鱗なしに動いてたニセモノだって言いたいのかよ」

「ほとんど正解。それがわかってるくせに、貴男はずっと、誰を探しているの？　だから『わたし』は、貴男を恨むのに」

何の話か、吸血鬼にはさっぱりわからない。「忘却」が何故そんな事を言い始めたのかも。

探していた天使がいけないというなら、もう遺跡に入って相方を捕まえ、次元移動で元の世界に帰って良いわけなのだ。ここに吸血鬼も会いたかった師がいるから留まっている。

師が何故炎獄に潜んでいて、そして紅い髪の「忘却」に絡まれるのか、吸血鬼は何一つも事情を知らない。師自身は相手が誰なのかをある程度は判っているようで、この場で吸血鬼は傍観に徹するのが正解だろう。

「オレがニセモノを探し続けていたら、その逆鱗——本物の桃花は、オレを恨むって話？」

「諦めたくせに、偉そうに言うのね。貴男は楡猫羽が生きるために、橘桃花の体を依り代にすることを認めているのに」

それを言われると、師は困るだろう、とは吸血鬼にはわかる。かつて恋心を持っていた桃花が、見知らぬ猫羽として生を繋いだこと。猫羽の兄が師の旧い仲間の養子でなければ、師は果たしてその現実をすんなり受け入れられたらうか。

「……桃花が望んだことだろ、それは」

「そう。死を望んだ相手を止めないことが、貴男の愛情表現なら仕方ないけど」

紅い髪の「忘却」は何故、そんな話で師に突っかかっているのか。どうやら預かる素因に非常に影響を受け易い性質の「神」であり、師と話したいのが「ホンモノの桃花」の未練。だから願ったのだろうことはわかる。

「その程度の想いで貴男はいつも、『わたし』から『あたし』を奪うの。『わたし』がどんな想いでいるかも知らずに」

「全然わかんねーんだけど。その『わたし』——桃花は実際、誰を指してるんだ？」

師は元々、かなり敏い方だと吸血鬼は思う。吸血鬼が全然ついていけない会話に、理解が追いつかないながら要点を拾っている。

ほとんど正解、と紅い髪の人形は先程口にした。

逆鱗——紅い紋様が顕す者が、橘桃花そのものではない、完全な正解ではないという意味。

「……じゃあ、見せてあげる。大昔の夢を」

「忘却」から白い光が発した。その華こそ古の「神」の、神秘の「力」だと示すように。

吸血鬼と師を、真っ白な光が包んだ。何でオレまで？ とまず思った吸血鬼だった。

吸血鬼には、楡猫羽の依り代ということ以外に、橘桃花との縁はない。そう思っていたのが、北の聖地の遺跡が近いせいか、吸血鬼と縁があるかもしれない月の青女が突然出てきた。

一人で荒野に近い山中にいた。山の斜面にぼつぼつと、石の柱の神殿が立っている地で、吸血鬼がおぼろに見た青女よりも若い女性がいる。昔風の長い布を肩で留めて服にして、神殿の前でこちらに向かって話しかけてきた。

——はあ？ 竜宮にまでお前を連れていけ？ どうして今更、私が竜宮なんかに行くと思う。

「忘却」の「神」が、再現をしている光景。記憶の主らしい相手に向かって、まだ北の島におらず、青女と呼ばれていない女性が話す。珍しい紫の髪を、頭に巻く布で隠している。青女の白い虹彩の目には記憶の主と思われる、目を隠すほど長く黒い髪の児女が映っている。

——私に言われたって。この体がそう望んでいるから、私に拒否権なんかないんだけど。

児女の隣では保護者に見えそうな、茶色い括り髪 of 美しい男が頭を抱えていた。児女はふわふわと感情の掴めない喋り方で、重げな容姿と裏腹に淡泊な声だ。

児女の足下では、黒い仔犬がべたんと座っている。珍しいのは、短い尻尾が密かに蛇である仔犬であったこと。

——何でわざわざ、争いの女神なんかを退治しに行く。私達にはそれぞれの領分がある。お前は天すら降りてないのに、どうして気楽に暮らさないんだ。天女の血筋はお前達で最後だろう。地上における高次存在の監視役は、最早天使になった時代だろうに。

それは世界が、「神暦」となって浅い頃合いのようで。

それまで地上の高次存在を裁くのは天上人という化け物の元締めで、児女は特別、裁きを司る血筋ではなかった様子。児女自身もその大義名分で地上に降りる、己の渴望に気付いていない雰囲気だった。

——いいでしょ、貴女は死ぬつもりの竜だし。竜宮に行ったところで、影響はないでしょ。

月の青女になるはずの、紫の髪である女性。外見が暗そうな児女とは親類の間柄に見えた。

——自身である紫竜を分離するために、月の逆鱗で龍神となった竜。貴女の力は訴えないの？ 天の力を引く空の系譜として、地上の醜い同胞——災いを叩きのめせ、って。
——お前なあ.....災いの元に近い天女のくせに、同族嫌悪も大概にした方がいい.....。

結局女性は、児女を竜宮に連れて行ける、旧知の竜人を神殿に招き寄せる羽目になった。現れたのは双子の、強い竜人の女達だった。
——こんな遠方まで、足を運ばせて悪いな、キラナ、ダルミン。すまないが竜宮の治安のために、このバカを連れて行ってやってくれ。

天上人と竜人は敵対しているので、児女と付き人と黒い仔犬は、縁故がなければ閉鎖的な小さい大陸「竜宮」に入ることができない。

月の青女の知人な双子の竜人は、姉がいつも難しい顔付きをしているものの、妹は明るく嬉しそうな顔で、児女の手を引いていった。

その後はもう月の青女は関わらず、吸血鬼と縁のある出演者はいなくなった。それでも光景がまだ続くので、師を探す意味も含めて、吸血鬼は竜宮に向かう一行の後を追った。

青女がいたのは「地」を司る聖地らしく、北の小島とは違う大陸にあった。北の聖地に来る前にいた神殿。そこから違う大陸に竜人二人は、児女と付き人を連れ立っていった。

——ねえ。あのこの名前を教えてよ、アナタ。

ふんわりと、銀色の髪の竜人の方が、児女の付き人——赤毛の馬を引く男に話しかけた。

——アナタの名前も、この馬のことも。あとあのこと一緒に、可愛いワンちゃんのことも。

にこにこしている竜人の顔には毒気がない。児女は黒い仔犬を抱いて、赤毛の馬に付き人と共に乗って竜人の二人についてくる。銀色の髪の竜人が空に長い氷の滑り台を作って、その上に跳んでは滑り下りて、長距離を一気に超える無茶を繰り返すので、野営で焚火を囲んだ時に付き人の男はまず悪態をついた。

——俺達に名前なんて、上等なものはない。『意味』があるだけだ。あいつは、^{めいや}冥夜の君。

冥夜の君。その「意味」を耳にした瞬間、吸血鬼の内をわけのわからない感傷が襲った。

その名と自身は、何か縁があった気がする。けれどここにいる吸血鬼には関係のない話で、付き人の男と銀色の髪の竜人の話を見守る。

——冥夜ちゃん、ね。竜宮でもそうだけど、高貴な天上の方の末裔は漢字で呼ばれるよね。アナタもそうなの？ 漢字のヒト？

男が黙ってしまった。男の隣で黒い仔犬を膝に乗せる児女が、下を向いたままで言った。

——白犬。漢字なら、そう呼んでる。

ふ……と。笑顔のままで、銀色の髪 of 竜人が小首を傾げた。児女はおかしな事を言った気はないらしく、無心に仔犬を撫でている。

ここまであまり喋らなかった、もう一人の黒髪の竜人が^{たしな}窘めるように双子の妹に言った。

——キラナ。あまり詮索しては失礼ですよ。

どちらも髪を肩に乗せて、右側で銀色の髪、左で黒髪を一つに括る対照的な双子。いつも淡い笑顔の銀色の竜人と、実直そうな黒髪の竜人に対して、付き人の男は眉を寄せた。

——でも、竜宮に巢食う災いを排除するために、わざわざ天から来てくれたのよね？

私達も、できる限りのことをしなきゃ。そのためにはお互いのこと、よく知った方がいいと思うわ。

児女がふっと、顔をあげた。

前髪の隙間で大きな金色の眼に、銀色の髪 of 竜人が映る。そこに在る呪いのような想いを、自らすらも知ることはなく。

＊

意図のわからない太古の光景を、吸血鬼が「忘却」に見せられている一方で。

罾や衛兵の幻以外、変化のない遺跡に疲れた燕雨は、壁を調べている風の死竜に、黙っていたが気取っていた一つを口に出した。

「アンタ、ここを『夜』にできる手段、本当は持ってるんだろ。橘桃花がもし来たらとか言わずに、もう使ってみてくれよ」

風の死竜が、目を丸くして笑う。胡散臭い声色でびっくり、と言う。

燕雨は自身の故障した五感で、勝手に伝わる相手の話を続ける。

「アンタは多分、森に吹く風みたいな何かで。しかも今のアンタは、夜の森に居続ける死竜」

それは何度も、燕雨の脳裏に相手から伝播する慟哭の光景だった。この男がいつまでも囚われている、連れ合いだったはずの首の無い儿女が打ち捨てられた、どこまでも暗い月夜の林間。

——なんで……こんな——……。

哀しげに目を閉じている黒い十字架。その首を拾った時から、彼の長い祈りは始まる。

しかし真面目に問うた燕雨に対して、風の死竜は不思議そうな顔色になった。

「……君に何が観えているのかは、知らないけれど。僕はもうとっくに、夜を招こうと、霧を出し続けているんだけどね」

そう言えば遺跡の内なのに、上層では更に白い風が深まっている。燕雨も上を見上げる。

「この霧は——『夜』に関係あるのか？」

「そうになっていたはず、とあのコは言ってたけど。でも僕もそこは、疑問に思っていた。『^{とうかすい}桃花水』に力を借りてるというあのコは、自分を『夜』のものと思っているようだけど」

燕雨には全くわからない話が突然出てきた。

「桃花水」とは燕雨の妹の命を守る宝で、風の死竜曰く「夜の女神の力」。しかし風の死竜には、燕雨の知った者の姿が浮かんでいる。それは養父の仲間の竜牙烙人で、燕雨が命を失いかけた時、吸血鬼と一緒に助けてくれた。

今でも燕雨は意識の持続が難しくなった時、烙人の灰が溶かされている火酒を飲む。それは燕雨には、拙い魂の助けになるというから。

「……ラクトに関係あるのか、この霧は」

だから観えたままに思わず尋ねると、壁の文字を辿る風の死竜の手がびたっと止まった。

難しい顔だけを、風の死竜は燕雨に向けた。こうも内心を探られるのは、夜の女神の相手以来らしかった。

「……君は周りに踏み込み過ぎだね。観えていることを口に出し過ぎると、災いを呼ぶよ」

確かにそこには、殺気に似た複雑な感情を持ち始めた相手がいる。今の指摘に風の死竜が引っかかること、そちらの方が燕雨は気になる。

「ラクトの双子が、霧の精霊だろ。今は猫羽が持つてはずの精霊を、何でアンタが使うのかって、妹のことなんだから気になるだろ」

燕雨の妹の猫羽は、人間なのに悪魔使いだ。遥か昔に死に別れた妹が、橘桃花を依り代に蘇ったことにしても普通ではない。

不安定な魂を補うために、烙人の双子だった霧の精霊が死後に猫羽に贈られていた。この霧にそうした烙人の気配がするのは確かなのだ。

「なるほどね。危うい話だとはわかりつつも、妹ちゃんに関わるのなら無視できなかった、そういう美しい兄弟愛かな」

言う通りにわかっていて言及した燕雨は、瞬時に変わる空気を予測していたので、咄嗟に飛びのいた。しかし少しだけ拙かった。

風の刃が死竜の周囲で吹き荒れた。全てをかわすことはできず、左腕が犠牲になった。

「っ——……！」

ぱったり切られて落ちた腕。とにかく燕雨はそれを拾うと、ここまでやるか、と距離をとった後に死竜を睨んだ。決断すれば容赦がないのは、竜人らしいと言えるかもしれない。

「それなら、妹想いの君を害せば。兄想いの妹ちゃんも、ここに来てくれるだろうね」

風の死竜が言った通り、遺跡の内が突然に黒く染まっていった。夜の女神と縁があるという、「橘桃花」。その体を依り代とする妹が炎獄——この遺跡に入ったのかもしれない。

それが可能そうだと燕雨も思っていた。何故ならつい少し前、別の道で炎獄に入った時、妹の姿で橘桃花らしき者が顕れたからだ。

風の死竜は、取引相手の燕雨に一応遠慮し、燕雨を傷付けて妹を誘い出す手を封じていた。それを感じていたから、燕雨は踏み込んだ。風の死竜には霧の力は、新たな切り札らしい。そこに関わるはずの烙人との縁には、迂闊に触れてはいけない何かがあるのだ。

視界を染めていく真っ黒な夜に、風の死竜の声が遠くなっていった。

「ありがとう、夜の子供。これからここは、出るどころか醒められない夢になるよ——」

今までの罟の連続や幻の衛兵達の相手も、大概面倒くさい遺跡だった。それが今度は、左腕を失くした状態で大きく周辺が変わる。招いたのは自分だが、燕雨にも戦慄が走る。

この遺跡を知る親友に聞いていたことだが、月が出るところでは数々の夢が再生される。誰かの過去や強い想い、もしくは数多の記憶や知識。四方八方黒い視界が、夕暮れ程度に戻っていく。伏せる意味も含めて一旦座った。

とりあえず、襟巻を左の上腕にぐるぐると巻くと、口で引いてきつく絞めて止血した。吸血鬼と合流ができれば、治療してくれる。幽鬼の身ならその必要はないはずだが、炎獄に来てから燕雨は、ある違和感が疑問だった。

「さて……セッかく顕れてくれたなら、俺の所には来ないのか？ 猫羽——いや、桃花」

広がりつつあった夢が、水面のように一度揺れた。燕雨はさっさと立ち上がって、そして驚くことになる。

何で……と。遺跡の中にいるままなのに、見たことのある船が暗闇に鎮座していた。「天……龍……」

一度はほとんど死んだ燕雨は、吸血鬼に天の島で助けられてから二年、散々鍛えられた後に地上に帰ることになった。それは妹とそっくりの姿で、燕雨のことを呼びに来た娘があったからだ。

——^{つぐみ}鵜が危ないの。だから、帰って。

娘は自身のことは話さずに、「帰れないから送って」とだけ言って、鍛えたての燕雨の翼で空を往くこの船まで送らせている。

地上で燕雨が世話になった剣の師の娘が鵜で、鵜も後にこの船に攫われるなど、「神隠し」の危機が迫ることを教えた。そんな宿縁のある空艇。

この船がかつて、北の遺跡の鍵を持つ悪魔の命令で、烙人の双子が設計して遺跡内で建造されていたことを燕雨は知らない。現在燕雨と最も縁のあるだろう遺跡の宝が、夢の舞台として目前にそびえていた。

「さっきは迷路しか見えてなかったのに……どこにあったんだよ、こんなでかい船……」

結界の鍵と共に遺跡に入れば、上階に行くごとに狭くなる柱だけの空間が最初に現れる。最も広い底層に「天龍」は置かれていたこと。そんな情報が誰かから伝わってきた。

ここにいるのは燕雨だけではない、とそれでわかり、故障した五感が訴える方へと向かう。しかしそれは、この夢では無謀な行為だった。

天龍の周縁を、ヒトの気色を探して走った。月明かりを反射させている遺跡の内はどこも暗いが、障害物の有無は判る。今のところ、畏も人影も天龍以外の設置物もない。見える範囲にはただ継ぎ目のない石の平坦な床だけで、遺跡の端の壁は暗くて見えなかった。

己の左腕を持ち歩くのが、無様な上に体が悲鳴を上げ始めた。遺跡で幻の衛兵と戦った頃から感じていたが、この左腕を燕雨は簡単に捨てるわけにはいかなかった。

「やっぱり……俺……」

竜の墓場という異境に迷い込んだ時には、生身の自分ではなかったために、敵と戦う、剣を使うことができなかったのを思い出した。

「刃^{レン}と一緒にいるってことは.....これは」

しかし現在、燕雨はずっと剣を使っている。剣につけた飾りに宿る、「刃^{やいば}の精霊」の加護で剣が具現化されているだけかもしれないが、燕雨は生身で炎獄に來た可能性がある。炎獄に入る前に王子と取引はしたものの、王子の言葉がそのまま適^{かな}っているかは断言できない。

もしも生身でここにいるなら、失血の多い体の消耗が激しいのは当たり前で、落とした腕も捨てれば戻らないだろう。

そもそも最早、接合など難しいかもしれないが、炎獄という場所に自身の欠片を置いていくのは災いの気がする。そんな直観だけがあった。

「俺も下手したら、義手かな.....」

それだと、鵜が怒るだろうな。溜め息と共に呟き、薄闇で立ち止まったその時だった。

義手。それは燕雨の養父の右手を思っの発想だ。若い頃には暴走する真っ赤な飛竜を抱えていたという養父は、腕に封じた飛竜を、腕を失くす事で一度切り離れたときいた。

そうして養父のことを思い浮かべたから、なのだろうか。何故か突然、全身が引きつるような冷氣と共に、ずっと感じていた誰かの存在が今度は声として直接響いた。「その腕を捨てないことは正解だ。可能ならなるべく早く、地上に還った方がいい」

気強さも雰囲気も違うのに、養父を彷彿とさせる淡い声色。燕雨は啞然と周囲を見回す。

天龍と養父に、ほとんど縁はないはずで、そもそも炎獄で似た声がするのはおかしい。何かの罠かと身構えるが、声は泰然と続く。

「炎獄で流れる時は、地上と同じではないが、変化は起こる。治療のできる仲間がいるなら、合流を目指せ。ここで得られるものなどない」

まずこの声は、何処から聴こえているのか。あるのは天龍と寒気に薄暗闇だけで、声以外の思念の情報、相手が燕雨を嘲^{あざけ}っているか、それとも心配している心なのか伝わらない。感情がダイレクトに來る普通の夢より遠い、ただ再生されるだけの幻の声。そうした感覚。

だから燕雨は、直球に尋ねるしかなかった。

「アンタは.....誰だ？」

体力の激減でふらふらとする。力の相性が悪い地にいれば、とっくに倒れていた。凍る水と月の力を冠する北の聖地は、「熱を奪う」地——地獄の青い炎と紫の月が本質の領域。

「すまないが、ここでは俺は姿を顕せない。かつて遺跡の結界の合鍵を青女に渡した縁で、無理やりに介入しているだけだ」

その一言で何とか、敵ではないとは思えた。燕雨を炎獄から追い出そうとしている点では、さざなみの天使の手先のようなだが、わざわざ声をかけるのは多分心配の心。

「じゃあ、月の青女と同時代の誰かか。俺が知るわけないな、そうなってくると」

そうだな、とだけ、声は神妙に応えてきた。

「じゃあ何で、俺に声をかけてきたんだ？」

飴と鞭、そんな勝手だけかもしれないが、養父の声に似ているのは気になる。もう少し話を続けたい、燕雨はそう思っていた。

この夜の闇を呼んだはずの妹も、燕雨の前に現れて来ない。遺跡が迷宮で、同じ場所にいたはずの風の死竜もいない。個々が各自の夢に叩き込まれたのかもしれない。

答えのない声に、燕雨は自分から告げる。

「アンタは俺の親父と、強い縁がある誰か。違う？ それとも、俺の持ってるこの首輪と」

何となく、確信だけがあった。どこからしているかわからない声は、おそらく燕雨のすぐ近くにある何か。その宿縁の予感だけが。

十 破 十

強大な力の神域の一つ、竜宮の秩序を乱す異分子は多い。北の領域の統括を継ぐという銀色の髪の竜人に、児女は竜宮を目指す道中で外套を掴んで尋ねるようになった。「どうして、貴女ほどの力があるのに、敵は力で抑えつけないの？」

水の流れを多少扱えるだけの黒髪の竜人と違って、双子の妹である銀色の髪の竜人には広範囲の水気の水結ができた。逆らう周囲を凍らせることも、更には光を細やかに使って灼熱を当てることもできる。極夜という水の後継でありつつ、熱を持つ異端の竜人だった。

「無駄ですよ、レーラ殿。私も同じことは、散々キラナに進言しましたから」

名前などない、と付き人に言われた児女は、冥夜の君より、こっちで呼んで、と伝えた。地上での仮の名らしいが、銀色の髪の竜人が拗ねた顔で、双子の姉を横目で見て言う。「それなら姉上が『極夜』を継いでくれたらいいのに。竜珠に適合できなくても、水流の力を使えたら水竜の長としては十分よね？」

世界の水気を司る「極夜渦」^{きょくやうず}が、その双子の竜人に伝わる力。水気と水流は同じ水でも素因が違うために、いかにも水竜らしい姉の方は力の秘宝を継げないが、子孫に適合するのを期待すればいいだけ、と妹は不貞腐れる。

ずっとふんわり笑っている銀色の髪の竜人は、双子の姉にはそうしてよく素顔を見せた。誰かに似てる、と、夢の傍観を続けるだけの吸血鬼には何故か頭が痛くなる。

一行の旅は最後にさしかかって、後は船で海を渡るだけだった。と言っても古い時代のことであるので、ヒト四人と馬と仔犬が乗る漁船を、水流を操って早く進めている。往路もこれで竜宮から黒髪の竜人の力で来たのだ。

復路で何度も魔物や現地の化生と揉めたが、銀色の髪の竜人は戦っても敵を一部凍らせて時間稼ぎをするくらいで、その力をほとんど無闇に振るわない。仕方なく交渉役となった児女の付き人に解決を任せていた。

「確かに私は、力押しの方が得意よ。でも、私の後には弱い後継者が生まれたら？」

船では何もすることがない。だから銀色の髪の竜人は舵をとる双子の姉をよそに、児女や付き人と子供っぽく話すようになった。

「私だってわかっているの。姉上は正しくて、私に合った統治を勧めてくれてるって。でも、私は、白犬さんみたいがいいの。どうすればぼったくりの通行料なんて取られずに、余所の領地を通ることができたり、お腹が減って暴れる魔物を^{なだ}宥めたりできるの？」

付き人がきいたところによると、銀色の髪の竜人はまだ十六歳だという。大人びた濃い茶髪の付き人とは違って、色々と悩む年頃。

儿女の方は、後継者の強弱は生まれてから考えればよいことであり、現時点で気にして統治法を考えるなんてわけがわからない、と無表情に言う。船で座る膝の上で、黒い仔犬も大人しくしている。

付き人は苦笑うように、銀色の髪の竜人の青く幼げな視線を受け止めて答えた。「縄張りの侵入者が嫌われるのは、恐れられていることが多い。強大な竜人であれば尚更、近付かれることすらも忌避したいんだろう。通行料は面子で高く設定されているだけだ」

だから旅の先や通行手段を明確にすること、早道でも空に氷の滑り台など簡単に作ってはいけないことなど、付き人は真摯に説明する。

魔物に関しても答は近い、と付き人が加えた。「貴女達程強大なら、魔を相手に変に気配を隠すな。恐れられた方が勝手に硬直する」というのも銀色の髪の竜人は山中の道で、小さな魔物を見つけて、「可愛い」等と寄っていったのは噛まれていた。気配を潜めていると対等だと舐められたのだ。

そんな話を冷静にする付き人に、銀色の髪の竜人は両膝で頬杖をつきつつ、目を静かに輝かせて無害な満面の微笑みを見せていた。「嬉しい。そういうことを教えてくれるヒト、竜宮には誰もいないんだもの」

沢山いる同胞の中で、彼女は異端者だった。竜宮では誰もが力の支配を是としている、と。

大体の場面で黙っている儿女は、銀色の髪の竜人をいつも見つめていた。その視線には竜人も気が付いており、何度も微笑みを返す。儿女は小首を傾げながら、それでも見つめる。

付き人は複雑そうに、儿女の頭を撫でる。儿女が天から管理を任されている要所では、感情など自覚をすると苦しいだけなのだと、竜宮についてから付き人が銀色の髪の竜人にこっそり教えていた。

「あいつが人の世の災い——『夜』の系譜の怨念を探していることは本当だが、それは、あいつの属する陰府とは本来関係がなくて」

付き人は元々、天上人の落胤で地上にいた。人世を知る者のために儿女の付き人となった。

竜宮という強い神域に具現し易い、天上の落とし物たる災いを探す。それはあくまで、陰府から一時離れる大義名分に過ぎない、と付き人は逢瀬の森の奥で語る。

「あの子供はあいつの仮の姿でしかなくて、あいつが探したかったのは、多分貴女なんだ。『極夜』の姫君——あいつは、貴女と同じ、淋しい仮初めの光。空に迷い出た『夜』の器」

儿女を心配するより熱い温度で、付き人の薄い色の目が極夜の竜人をじっと見つめた。真情を話せる相手というまっすぐな思慕を、極夜の竜人は余さず受け止めて顔を赤くする。

政^{まつりごと}に疎い極夜の竜人を、異邦者でも支えるようになった男。その縁が結ばれた夢だった。

こんな記憶を夢として吸血鬼達に見せて、「忘却」は何をしたいのだろう。かつて師に関わった「橘桃花」が何者なのか、その問いにこの夢は何の答を投げかけるのか。

「橘桃花」があやふやな存在であるのは、体は吸血鬼の相方の妹に、魂は竜人の逆鱗として悪魔の女性に継がれて生きているからだ。加えてその本質は、更に別の悪魔に宿ったという。師はその真実を知って、「橘桃花」を師の知る相手に戻したい望みを捨てた。吸血鬼の相方を助けるために滅びることを受け入れ、それでも死後まで炎獄などに留まっている。吸血鬼が漠然と知るのはその程度で、今までの夢と「橘桃花」の縁がさっぱりわからない。

竜宮に辿り着いて、天の儿女は極夜の竜人の兄弟達を含めて多くの竜人に会った。「夜」の系譜の力、「災い」を逆鱗に降ろした一人の女を見つけた。

儿女がエリスと呼んだ竜人の女は、竜宮に紛争を起こすことを企み、黒い仔犬を犠牲に討伐される。竜人であるのに項^{うなじ}にある逆鱗から黒い翼を生やす女で、儿女の眼には隠された翼が視えていた。しかし竜人の女と異邦者の儿女が争って、竜宮で儿女を信じたのは極夜の銀色の髪の竜人だけだった。

——レーラちゃんは、私達の棲む場所から、命^{はら}がけで災いを祓^{はら}ってくれたのに……。

儿女をかばった極夜の竜人も糾弾された。儿女の付き人も危うく投獄されそうになった。

竜宮の竜人達に批難されていることより、黒い仔犬を失った件で儿女は落ち込んでいた。しかしそれも、儿女自身は解っていなかった。エリニウスは死んでない、姿を変えただけ、と平然としているので、黒い神犬に竜の女を襲わせ殺した子供、と危険視ばかりが進む。

この頃には極夜の竜人と儿女の付き人は、既に深い仲になって久しかった。どちらかと言えば敵対することが多い天の者と、強大な極夜の竜人が懇意である状況自体に、竜宮の諸勢力は脅威を感じているとも言えた。

やがて、儿女が竜宮を出ざるを得ない形に、事は収まっていく。極夜の竜人は最後まで、誰^{そし}に誘^{そし}られても儿女をかばい続けていた。

——どうしてなの、レーラちゃん。あなたのためなら、私は反対者を全員片付けたっていい。

かつて、力の支配を拒んだはずの竜人が、儿女を抱きしめて涙を流した。抵抗しないように勧める儿女はやはり、淡々と答えていた。

——この事で争いが広がれば、黒い翼の思うつぼだから。私のやり方が拙かったの。まだ『夜』の災いは沢山あるけど、今度は私とは違う使者を、天から送ることにするから。

児女は陰府とやらの帰るというが、天にもいると言うのだ。そして、自分の魂はあなたと共に、と、初めてほのかに笑って言った。

——ありがとう、キラナ。あなたが私の鏡を、これから地上に存在させてくれる。

その児女の姿で喋る者は、「神」の眼と共に在った。天の翼を元々持った血筋の児女に、母を失ったある怨念が宿って「神」となった。天から追われて消えた母を探して、母の力が降りた極夜の竜人に出会ったこと。そうした児女を知っているのは、付き人一人だった。

ほとんどの天の怨念は、「人世での天」では覇権を失い、居場所を探して地上に降りた。まだ天に留まる者もいるが、名も無き天女や厄介者として新たな天の系譜に疎まれている。

そうした天の事情を夫となった付き人から聞かされながら、極夜の竜人は竜宮の者達に心を許すことをやめた。双子の姉も児女の件では、味方をしてくれなかったからだ。

——ダルミン殿は中立だったただけだ。俺達が異邦者であることは変えられない。

極夜の竜人との間に第一子が生まれていたため、付き人は天と竜宮を行き来することが許される身になった。第一子が強い火の力の元にあって、水竜である極夜の竜人よりも、夫の方が力の教育に適しているという理由で。

——そんなことは、私はどうでもいいのに。ねえ、私の光は、世界中のヒトのことを私に教えてくれるの。悪いヒトは数え切れない程いるし、貴男やレーラちゃんは信じられないくらいキレイだった。ここのヒト達は、他人に興味がないの。弱い化生なわけでもないのに、ヒトの心を知ろうとしない。

何処の空でも氷の架け橋を造れる銀色の髪の竜人は、世界中の空から光を集める異端者でもあった。極夜の長となるまではそこまでして世の情報を集めはしなかったようだが、ヒトは簡単に離反するもの、と児女の件でも学んでしまったのだ。

——貴男や私の子供達には、傷付けるものは近付けさせない。あのね、昨日は、不思議な夢を見たの。レーラちゃんと同じ気配のする銀色の狼が、私の中に入って来たの。ねえ、二人目の子供は、何て名前にしようかしら？

ずっと笑っている妻の心に、夫は初めから気が付いていた。児女に宿った怨念と自身の関係を、彼女は無意識に悟っていたことを。

児女との別れは極夜の竜人にとって、娘を守れず奪われたような深い傷になった。酷く強い力を持つ竜人であるから、そんな無力を味わったことは過去にはなかったのだろう。

この極夜の竜人と、冥夜の君という児女は誰かが重なる。吸血鬼は闇の中に戻ったので一人で座って考えるが、いくら腕を組んでも曖昧な直感がつながってくれない。

「.....銀色の狼、ねえ」

銀色は吸血鬼にとっては、月の色だ。魔道の話としては青炎^{せいえん}と呼ばれて、実際力として見ると青白い白金の鏡が月ではあったが。

おそらくここまでの夢の要は、極夜の竜人と児女だけではない。それだけは感じていた。

＊

橘桃花って、誰か知ってる？

暗い天龍の置かれる層で、謎に話しかける養父似の声に、燕雨は会話を続けるためだけに適当にきいた。

「俺の妹の姿をしてて。あ、まず、俺の妹のことはアンタ、知ってる？」

燕雨を知っているようなので妹も知る前提で言ってしまったが、何故燕雨を知るのがわからない者。養父にも燕雨の持つ首輪にも関係があることは否定されなかったが、どういう縁であるかは話されていない。

養父似の声は、妹のことは知っている、とすぐ返してきた。それは何処か、遠い思慕を感じさせる色で。

「橘桃花に関しては、定義がまず難しいな。人世に送られた紅い光のことか、『桃花水』の水の器か、それらを総括する混沌接続者か」

「.....何だ、それ。それが全部、『橘桃花』の可能性があるってこと？」

養父似の声は、燕雨に早く人世に帰れとは言うが、帰れる方法までは教えてくれない。知らないのかもしれないし、帰れと言うこと自体が仕事かもしれない。どの道燕雨自身に現在、この「夜」を抜ける方法はないので、遺跡に「夜」を呼んだはずの相手について情報を得るしか打開策は練れない。

「ほんとに、親父みたいに誰かのことを力風に言えるんだな、アンタも」

とりあえず何故か、「橘桃花」が三パターンあることがわかったのは収穫だろう。燕雨が母だったはずと聞いた桃花と同じかは判らず、他にも違う「橘桃花」があるかもしれない。そうして複数の形を持つものが「橘桃花」と、そう言いたい声の真意は伝わっている。

「じゃあ、猫羽が使う体の桃花はどれ？」

「おおむねは混沌接続者、だろうな。しかしそれは、『橘桃花』としてはニセモノになる」

「ニセモノ？ 何で？」

「『桃花』とは、紅い光の逆鱗を宿した人間に贈られた名だ。名付けた親は、『桃花水』との縁を視ていたはずだが、逆鱗と『桃花水』は元々引き離されていて二つの存在になった」

だから、「桃花」と呼ばれ得る者は二人いる、それが「ホンモノ」だという主旨。しかし人間の「橘桃花」自体を見るなら、橘桃花をしていたという「混沌接続者」こそ本物ではないのか。燕雨の伝え聞く橘桃花は元人間の母だ。

「.....まあいいや。とりあえず、それじゃ、『夜』を呼んだのは混沌接続者でニセモノ？」

「いや。この『夜』は、冥府に属する月夜の『神』が、己を最大に映し出している夢幻だ」
え。風の死竜が言ったこととは違う情報に、燕雨は慌てて記憶を洗い直す。
——彼女とこの遺跡には、月以外縁はない。彼女は一度死んで、その後に不滅の『神』
 becoming.

「『桃花水』は、『夜の女神の力』だって、俺はさっき聞いたんだけど」
「それも間違いではないな。『夜』の系譜は、世には密かに多い。最も純粋な『夜』に近い
のは混沌接続者で、『桃花水』も実質的には、彼女が管理を続けている」
養父似の声に、妹のことを聞いた時の色がまた戻った。大切な記憶を想うような響き。
「しかし『桃花水』は本来、『夜』ではなく光——空の器だ。彼女を『夜』につなぐもの
が、ここを『夜』にしている冥加とも言える」

段々と燕雨は、声の内容を整理することをやめたくなくなってきてしまった。もっと簡単
に説明してほしい、その思いでつい口にする。
「じゃあ空の女神を月夜の神が夜にしてて、ここも月夜の神が夜を具現した。そう思って
俺に何か不都合はある？」
「そこまでは知らないな。あと、正確には、夜の女神より月夜の方が空の系譜でもある」
「もうその辺はいいよ、余計わからなくなる。でもここに月夜の神がいるなら、風のアイ
ツ、会うことはできないのか？」
自身の腕を切り落とした死竜に、心配するように言う燕雨に、声の空気が何処か澱ん
だ。燕雨としてもこれで腕が無くなったら痛い、挑発するために踏み込んだのは自
分だ。
「橘桃花と一緒に、月夜の神がいるってことだろ。アイツはそれ、多分知らないと思う」

燕雨が腕を落とされた瞬間、遺跡の「夜」が始まったので、燕雨を心配する妹、その
体の「橘桃花」が来たのは間違いのないだろう。しかしそれが「夜の女神」に縁ある「桃
花」ではなく、「月夜の神」だというなら。
「あ、まずい……それだとアイツに、猫羽を連れていかれることになる？」
だから声も、黙っている。風の死竜に同情がないわけではないが、教えるのも微妙だ
と言わんばかりに。

「あれ、でも、ラクトが好きで探してたのは、『桃花』だよな？ 昔の桃花は混沌接続者で、
今の桃花は月夜がいて……じゃあ、ラクトはどっちを探してることになるんだ……？」
「混沌接続者自体は、夜でも空でもあるな。月夜は彼女の形を決める」
「……何かもう、全然わからないんだけど」
「月夜は空の系譜、と言っただろう？ そそこが^{そご}齟齬の原点だろう。月夜がいるなら、混沌
接続者は空の姿になる。しかし混沌接続者が単身の場合、空ろな夜の女神と思えばいい」
まるで実の子を諭すように、穏やかに声は語って聞かせる。落ちた腕を握りしめなが
ら、燕雨はやっと少し頭がすっきりしてきた。
「何で月夜は、空になるんだ？」

「月夜には光があるからだ。光ある天の者が、空の系譜と定義される。混沌接続者も何かで光を得れば、空だ。空と夜は同じものの表裏」

言葉遊びの連続のようで、くらりとした。色々と教えてくれる声は助かるが、そろそろ声そのものについて訊いてもよい頃だろう。

「.....アンタはさっきから、桃花——『彼女』について教えてくれるけど。俺に何を思って、ここで話してくれてるんだ？」

声にはまるで、「桃花」が愛しい相手なのかと思わせる優しさが時々混じる。燕雨のことも養父と同じように、守りたくて話しかけている節を感じさせる。

「アンタもさざなみだろ？　俺を外に出す気で情報をくれる。でも俺、一人では出れない。シアが来るまで俺は待つしかないんだ。俺と話してもアンタに得はないと思う」

この先の心づもりについて、素直な部分を燕雨は伝える。他に取れる道があれば方針を変えるが、声に深入りをしてみたくなった。

「.....柔軟だが、実直だな。娘に似ている」

「——へ」

そこで声が出してきた事柄は、意外な展開だと燕雨には言えた。

「娘は今、外で吸血鬼の方の相手をしている。そこに娘の恨み相手がいるからだ。俺は娘のためにこちらに来た、と言えば近い」

言いつつ、声の気色には物憂さが混じった。娘と連携して行動を取れているわけではない、そう燕雨の直観は察する。

「.....娘に償いをしたいのか、アンタは」

声はずっと、肝心な情報を与えはしない。声の主が何者であるのか、踏み込む度に違う方向へかわされるか、今のように黙り込む。

「竜の墓場で.....俺がすぐに人世に帰れる、道筋を教えてくれた奴がいるんだ」

意図的に臨死の状態にされて、燕雨は竜の墓場という黄泉に入った。普通は簡単に出ることができる所ではないので、ただ一瞬しか関わらなかった相手であっても、出る方法を教えてくれた謎の紅い誰かを思い出した。

「あいつ、俺の血縁みたいな心だった。アンタに似てた。さっき、風の死竜の奴、俺のことを夜の子供って言って。あいつが夜で、アンタがその父親みたいに俺には感じる」

養父似の声は、おそらく自身の情報を出すことを禁じられている。だから燕雨の方から言い当てなければいけない。色々違うところがある気はしたが、墓場にいた女神を夜だというのも違う気がしていたので、尋ねてみた。

「なるほど.....その勘の良さは、彼女によく似ている。あともう一步、というところだ」

夜の女神と燕雨が似ている、のニュアンス。燕雨はあの女神の子ではないと思うが、紅い誰かの血縁でもない。燕雨の実の両親は大昔の化け物なので、夜の女神や紅い誰かと何か縁があるのかもしれないが、正解ではない。

「じゃあ、あいつの親がアンタってところは合ってるな。だからアンタは、俺の方に来た」
 黙るので当たり前だろう。間違っていたら、詳しい情報はなしに何かを言い返してくる。
 「炎獄に自分で来るんじゃなくて、無理やり落とされると帰れない、ってあいつは言った。この天龍のあるエリアまでは俺が自力でできたわけじゃないから、長くいると取り込まれる。それをアンタ達は心配してる？」

こちらも答がないので、やっぱりそうか、と燕雨自身も改めて気合いを入れる。
 「で……娘の恨み相手って、ラクト？」

声が一瞬浮かべた気配が、燕雨の知る男に似ていた。そこから連想が広がる。
 「近いが、違うとも言えるな。本当に恨みを受けるべきは俺だ」
 「でも娘はラクトを恨んでるんだな。それでいつまでも炎獄なんかに魂が残って、アンタはそれを心配してる？」
 「……俺がここにいるのは、元よりの定めだ」
 「アンタは元々さざなみに近いってことか。娘は違ったのに、竜の墓場に行ける奴なのに、ここに留まってて心配なんだろ」

あの時燕雨を引っ張り上げた者は、確かに生粋の竜人の気配だった。それでいて明確な「魔」——墓場では身を隠すべき反則の存在。
 「あいつがもしも、さざなみ系の『魔』なら……魔竜って、俺の悪魔のお袋じゃなくて、本当はあいつのことなんじゃないのか」
 声が止まった。それが確かな答だった。

燕雨の養母は、その実母を悪魔と化して、実母の体に宿っている。橘桃花の魂を継いで、悪魔の体と業に縛られているが、そうする事で魔竜と化することを防いだのだと。
 「母さんは魔物なんだ。でも魔竜じゃない。母さんになるはずだったのが桃花で、魔竜はあいつ。あいつは俺を子供のように思ってた……本当の桃花って、もしかしてあいつ？」
 「……魔竜は本来、^{フューシャ}紅い花の名を持っている」
 「じゃあ、アンタの言う紅い光と、『桃花水』の水の器、その両方があれば桃花。母さんは水の部分で、あいつは紅い光がメイン」

とりあえず「本物の橘桃花」をそう仮定する。天龍の階層で役に立つかは判らないが。
 「俺に昔に天龍を教えたのが、猫羽のふりをした橘桃花で、混沌でニセモノ……天龍が今ここにあるなら、その桃花には会えるはずで」

意味も目的もわからないまま、状況の一つずつ紐解くしかない。探偵バイトをしている妹なら楽しめた事かもしれないが、燕雨には闇雲に想像を広げるだけの徒労だ。声の主が我慢強く相手をしてくれなければ、とっくに考えることを投げ出していただろう。
 「……桃花の夢に、ここから行きたい。天龍に入るしかないよな、それは」

答はなかった。燕雨を外に出したがる声はそうさせたくないはずで、実際危険を感じるのだが、そうするしかないと解ったのだった。

＊

天上人とは、現在天の番人である吸血鬼にとっては祖先にあたる。吸血鬼の前身は天に生まれた人間の子供だった。

天の男と、地上の女の間に生まれた。地上の女には風と水の竜の血が細く流れていて、吸血鬼を相方とした天使も水の竜の末裔だ。もしも天使が風竜の素因も持っていたなら、とても似た本質を持っていた同士だと今更にわかった。

「なのに、オレの前には出てこないんだよね、汐ノ香はずっと」

吸血鬼との縁が、さっぱりわからなかった夢が終わった。師にも果たして、縁はあったのだろうか。橘桃花の影は何処にもなかった。

傍観する吸血鬼を包む暗闇は続いていて、新たな光が見える方へ向かっている。先程の夢は始まりに過ぎないのだろう。

「さっきのやつは、『宝珠』とは無関係そう。天女って、守護者の天界人とは違う『神』系ばいね」

だから「忘却」とは、何か縁があるはずだ。最後の方で、天に戻った児女が一瞬見えた。児女は己の分身である松明に違う明かりを、他にいる二人の天女から灯されていた。「今度は違う使者を送る、と言ってたっけ。松明を天から投げ落として、紅いオーロラが空を染めた……。日本で初めて知ったけど、オレ達の世界ってそういえば、オーロラとか見たことないよね」

「忘却」が再生しているだろう次の夢は、紅が中心の光のカーテンの下にあった。人間の世界を行き来して久しく、漫画やテレビを解説されながら見るのが好きだった吸血鬼にとって、オーロラという自然現象を知ったのは人間界での情報なのだ。

「魔界はもう最初から、ずっと空が紅いし。さて、この夢達は最後まで付き合わなきゃ、終わってくれないのかな……？」

光のカーテンの内に入った。そこでは今度は、突然激しい戦闘が行われていた。吸血鬼は見ているだけで巻き込まれないが、激しい真っ黒な洪水と大きな黒い獣が翼を生やし、竜宮と思しき場所で惨劇を起こしていた。

見覚えのある黒髪の竜人が、赤い髪の謎の悪魔と、長く白い髪の竜人の娘と共に、黒い災禍に相対している。誰もが苦渋の顔付きをしていて、傍目からは魔竜め、と罵声が響く。必死に禍を止めようとしている三人が、保身だけの周囲から責め立てられる。

やがて最初に、白い髪の竜人の娘が死んだ。それで禍は止められたが、洪水の核になった竜人の死骸と、黒い獣からヒトの姿に戻った死骸を、黒髪の竜人が処理する、と言った。

しかし密かに、黒髪の竜人は悪魔の男と別の知人の少年の手を借り、死骸に残っていた「神」をはっきり「神」として形に成した。それは「神」を、その骸に閉じ込めるため。——フューシャは、自由にしてあげて下さい。私は実の妹も可愛い姪も、あの子達のことみんな不幸にしまった.....。

死んだと思われていた白い髪の竜人の娘は、紅い髪の魔と変わって息を吹き返した。竜宮から解放するためだと言って、黒髪の竜人は悪魔の男に紅い髪の娘の行く先を託す。

その後に悪魔の男と黒髪の竜人は、災いでしかない「神」を二人、月の青女がいる神殿へ連れていった。そこは青女と火を司る龍神が守る聖地で、災いの内の一人を封じる事と引き換えに、龍神達を強引に神殿から解放する。

黒髪の竜人は神殿に悪魔と結界を施し、己の目を遣した。青女は北の遺跡に移住した。悪魔の男はその後単身で、いずこかに消えた。

そうして神殿に災いを一人封じた後に、黒髪の竜人は近い遺跡にもう一人を連れていった。それが「忘却」の生まれだと吸血鬼は知る。

——一人にしてごめんなさい、ナディ。いえ、『白夜』。私はここで滅ぶ運命。私の目を継ぐ者に命を残し、ここを閉じなければいけない。

災いであろう「忘却」の「神」は、はい、と素直に竜人に頷く。神殿の方に封じられた「悪神」もそれは同じで、それは黒髪の竜人が彼女達をどちらも、災いでありながら深く愛^{いつく}しんだからだった。

——あなたに、大事な姪の逆鱗を預けます。私の最初の咎です。どうか.....神の祝福を。

「忘却」が黒い狼のような紋を受け取った。それは遺跡で、「忘却」が好きな水盤の後ろの壁画になり、近い白青の壁にも「忘却」は別の記憶を壁画にした。その絵は白い髪だった竜人の娘が、忘れたいと願った灰色の己。

——お姉様は、好きだから、誰より恨んだ。お姉様を捨てて帰ることなく、違う天使を娘にした後、大事な妹まで奪ったお父様を。

「忘却」はただ、知っているだけのことを壁画を眺めて呟く。父を忘れたいと願った娘。それは本当の意味では、父ではなかったこと。

「忘却」はまた、黒い狼の壁画も眺める。

——ごめんなさい。貴女の記憶は、私が大切に持っていくの。『冥夜』に抗^{あらが}うために。

生まれた時から、「意味」の決まった天上の者達。光は眺めるだけで空の系譜でない夜の「忘却」は、夜の名を持ちながら空の系譜である「冥夜」を初めから疎んでいた。

——『冥夜』はずるい。私達と同じで、自分の光じゃないくせに、空になれるのはずるい。

彼女達を愛した黒髪の竜人は、預けた姪の逆鱗を最も案じていた。既に死んだ姪で、空にある「冥夜」の鏡。「冥夜」が夜の災いを祓うために、天から送った使者の一人。

——夜に戻してあげるね、『冥夜』。お姉様が苦しんだように、貴女も一人になればいい。

その罫で「冥夜」は、地上で黒い獣となった。以後は竜の墓場で「神」を続ける、使命だけの月の抜け殻。

ここでまた、夢が終わった。吸血鬼は段々、夢の意図は判ってきたが、頭痛がいつそう酷くなった。

「何でだろ.....冥夜って、知ってる気がする」

そして「忘却」が見ていた、白青の壁の絵。描かれていた大きな猫には、覚えがあった。吸血鬼と相方の持つ翼を半分ずつに調整してくれ、「力」の意味を教えてくれた相手が灰色の猫の霊獣使いで、かつ水の悪魔なのだ。

やっと少し、これまでの夢と師が繋がった。

——オレがニセモノを探し続けてたら、その逆鱗——本物の桃花は、オレを恨むって話？
『白夜』が持ってた紅い逆鱗は、桃花よりもサクラねーちゃんの起源で、それが魔竜の源のフューシャ？ 確かラクトに一ちゃんのこと、恨んでたし」

^{サクラ}咲香という水の悪魔が烙人を恨んだのは、烙人が橘桃花を起こすことを諦めたからだ。桃花の実の姉である咲香は、体を差し出して猫羽を助けた桃花を救いたくて悪魔になった。

「でもサクラねーちゃんはラクトに一ちゃんのこと、好きだったよね。うやむやなままで結局、に一ちゃんが死んじゃったけどさ」

「——何だそれ。初耳なんだけど、オレ」

突然、師の声が戻ってきた。「忘却」の夢は完全に終わったようで、同じ場に戻れたようだが、師の姿が先程と偉く変わっていた。

「.....何で、学生服？ 若作りし過ぎ.....」

言うな、と師が^{うなだ}項垂れた。そこにはまるで、吸血鬼の相方のような若い容貌の師がいた。

「あの逆鱗がサクラで、オレを恨んでる？ サクラが好きなのは、従兄の春日龍斗^{かすがりゅうと}だろ」

何故か師が赤面して言う。桃花を奪った、と恨まれる筋合いはないと付け加えて、師と吸血鬼を閉じ込める夢の闇を見渡す。

「多分に一ちゃんは、前世とかのレベルでも、サクラねーちゃんに不義理をしたっぽいね」

「そーいう意味かよ、今までの夢は。でも、オレがサクラに手を出したら、何か罪だろ」

そう思って突き放し続けたのか、と吸血鬼は納得する。縁は深い、結ばれるわけにはいかなかった二人。咲香に出会った時には既に師は桃花を想っていた。しかし従兄という存在自体、師と酷似した氷の悪魔でもある。

「.....そっか。に一ちゃんを好きでいたら、ダメだって心。それが、炎獄に追放された魔物^{フューシャ}」

それならここには、隠さず師を好きでいた橘桃花はいない。師が炎獄を探す意味はない。

なのに師はあっさりと、切り返して言う。

「そうか。ならオレはサクラの奴を連れ戻すから、オマエはもう——人世に帰れよ」

漣汐ノ香はいない、とはっきり言われた。それなら相方の元に何とか次元移動し、最初に堕ちた奈落から地上に出るのが筋道だろう。

けれど炎獄の者の言を、信じる必要は初めからない。何が真実か、定まっていなのが炎獄という異所だ。吸血鬼や師に都合のいい展開を探すことだけが道しるべで。

「……汐ノ香はどうして、炎獄に来たの」

かつて相方に殺された吸血鬼を助けるため、雪の天使は己が「宝珠」を吸血鬼の力とした。その前に「忘却」の「神」を己の内に封じていたせいで、「神」の器となって炎獄に隠れた、それが吸血鬼の把握している事情だ。

「忘却」は炎獄に隠れないといけなかった。そうでなければ滅ぼされる、と恐れていた。誰に対して、「忘却」はそう思っていたのか。

『白夜』は、自分を壊そうとする相手の記憶なんて、消せるはずの『神』なのにね」

師が夢の闇からの出口を探しているので、吸血鬼も気配探知のアンテナを四方にのぼす。吸血鬼を閉じ込める「神」、その思いを探す。

網にかかったのは、「忘却」ではなかった。数多の可能性が併存する炎獄、そこにあった吸血鬼自身の幻の記憶。

——『桃花水』は、預かるけれど。あたしは『冥夜』に戻る——ねえ、時雨？

胸の奥から浮かんだ光景。それは「シオン」の夢、と何故か思った。

——時雨^{しぐれ}には代わりに汐音^{シオン}が翼として憑く。彼が『悪神』である必要は別にないでしょ。

知らない少女が喋る声に、知った声が答を返した。漣の奴が文句をつけてきそうだと。

——大丈夫よ。それはあたしが話をつける。

それでいいのか、桃花、と憂いが返った。炎獄に橘桃花はいる。その事を示すように。

「時雨、って……燕雨から消えた名前だけ」

時雨が「悪神」である必要。それは一体、どういう話なのか。さざなみが文句をつける筋とは、燕雨が「悪神」でないという含意。

相方と初めて炎獄に入った前回、相方の妹の姿で橘桃花らしきさざなみは姿を顕した。

——わたしはこれから冬花紫音^{とうかしおん}になる。そのためにアナタの血がほしいの。

それから、汐ノ香から託された天使の羽を渡せ、と言われた。どちらも最終的には拒み、相手が橘桃花であろうという見立ても、半分ハズレとされた。

吸血鬼と橘桃花には、縁がないどころか、「シオン」を介する何かの業があるはず。今頃それを思い返していた。

「とりあえず、『シオン』はオレにも、燕雨や橘桃花にも憑ける。本当は汐ノ香の羽なのに……汐ノ香は、オレに『シオン』を持たせておくために、帰ってこれないのかな？」

かいま見た青女の幻では、「シオンの翼」は世界の希望だと言われた。どんな化け物でも一人は止められる卵。それが何故、そもそも基本無害な汐ノ香に宿っていたのか。

猫羽が汐ノ香を連れていった、と「白夜」は言った。正直な話、猫羽は殺戮の天使たる二つ名を持って、善良なのに魔性のトラブルメーカーと言っている。吸血鬼を冷汗が襲う。

「忘却」は汐ノ香と、炎獄に隠れていないといけなかった。その意味の一端に触れて。

＊

現在の養母の魂であり、妹の依り代であり、魔竜の一部である橘桃花。燕雨が炎獄で縁を感じるのはその相手だけで、動かない状況を変える方法はそこにしかない。

そうは言っても、燕雨と橘桃花をつなげる「天龍」に乗り込んだ先で、風の死竜の夢が顕れたことは想定外にも程があった。

——あの方は独裁をすべきでしたよ。貴男と結ばれ恐怖政治を敷き、竜宮^{おびや}を脅かす天上人も全て力でねじふせれば良かった。

そこはおそらく、竜の墓場で。何度目かの来襲をした風の死竜に、燕雨に話しかけた声と同じ悪魔の男が相手をしていた。

——奇遇だな。俺も後から、そう思っていた。それなら魔竜など竜宮には生まれず、貴殿もいつまでも未練を持つことはなかっただろう。

連れ合いだった黒狼を求めて、竜の墓場に来襲をし続けた死竜。その黒狼は本来、この悪魔の伴侶となるはずだったらしい。

——『月夜』殿に、貴殿の記憶がない理由は俺にもわからない。今の『月夜』殿^{おおむ}は概ね、冥府の天女の器と言える。心は生前の『残夜』と変わらないが、在り方は制限をされている。

悪魔は伴侶になり得た黒狼を心配していたので、風の死竜に躊躇いなく知っている事を教えた。それがますます風の死竜の、未練を強めることになるかと解っていないながら。

驚いたことには、赤い髪の悪魔の容姿は、先程まで燕雨といた風の死竜と同じだった。白い髪と白い目は違うが、竜の墓場にいた時の風の死竜は全く違う顔で、遺跡内では何故か風の死竜が白い髪と目になり、悪魔の男の姿と化していたと言える。

風の死竜が世界に残り続ける術を、明確に言語化したのはこの悪魔だった。知らず命を長らえていた相手に、どうしてそれができているかを教えたただけなのだが、その時点で風の死竜は悪魔の色を持ったとも言える。

自嘲しながら墓場の草原を行く風の死竜が、色のない空を見上げて立ち止まった。
——月夜殿、か……貴女が、誰であっても……。

赤い髪の悪魔と風の死竜は、最愛の伴侶を早くに失った者同士だった。その痛みが燕雨の内を侵しつつあり、夢を出るという目的を忘れて、闇の中で風の死竜を追ってしまう。

この風の死竜は夢の光景か、それとも先程までいた本人なのか。燕雨が追いかけていることに気付かないので、夢の存在に思えるのだが、それにしても燕雨を侵す心が強い。——悪魔でもさざなみでも、あのヒトにもう一度会わせてくれるなら何でもいい。力でも魂でも、いくらでも売ってやろう。

いつまでそうして、道なき空を漂い続けていたのだろう。あまりに悲しくて燕雨も目を閉じたくなくなった。それが夢に囚われる罫でも。

だめー！ と。走り疲れて崩れかけていた燕雨の元に、その天使は突如降り立っていた。

「もー、だから言わんこっちゃない！ 天龍でまだしも良かったよね、オレが介入できるのはここだけだしね！」

「え……あんた、まさか……」

一言でいえば、その相手はとても謎の姿。

一見は養母の母である妖狐、さざなみの橘凧の顔の魔法少女なのだが、口調は全く違う。更には幼い背に小さな黒い翼を生やしている。

「じゃじゃーん、紫音ちゃんイン凧だよ！ 凧が直接助けるとボスに怒られるから、魔竜時代の凧を止めてたシオンちゃんの出番！ 憑いたらやっと思いついてこれ、不便！」

何を言っているのか、何故言っているのかわけがわからない状態だが、とにもかくにもその魔法少女は燕雨の助力に來たらしかった。

「あんな……シオンの翼の人格、か？」

「びんぼーん、さすがは最速の燕雨！」

きゃー、と嬉しげに燕雨の首に魔法少女が抱きつく。燕雨が仕える吸血鬼が持つはずの、天使の羽の一部である「シオン」。この遺跡に來た理由自体「シオンの翼」について調べるためで、やっと出会えた本丸の一つ。

「駄目だよ燕雨、月の夢に呑み込まれちゃ！ オレが來れたのも水月^{みづき}が殺されたからだし、早く助けにいかなきゃダメだよ！」

燕雨の思考が止まった。頭が真っ白になる。

「水月って——シア？」

「そうそう、猫羽ちゃんが來ちゃったから！ さざなみの猫羽ちゃんってマジで殺戮の天使なんだから、このままだと二人共永遠に炎獄に閉じ込められるよ！」

理性は理解を拒否したがっている。左腕の使えない今の燕雨に何ができるのか。しかし感情は呆然と現状を咥く。

「でもまず、ここを出れないんだけど、俺」

行かなきゃ、と焦りだけは湧き上がった。自身に何ができるのかも忘れていた燕雨に、魔法少女はさざなみの知識でたたみかける。

「はいまず羽を全部出して！ 次元はオレが歪めるから闇の中では自力で飛んで出て！」

元は強大な吸血鬼のものだった燕雨の羽は、それができるはずだと思い出させる。天龍に辿り着くのもそうでなければ不可能なので、後は遺跡そのものという壁をどう超えるかだ。それが魔法少女の「次元を歪める」だろう。

「どこに水月がいるかは自分で見つけて！　　ていうかでないと出られないだろうしね！」

ばたばた騒がしいが、余すことなく要点は伝えられた。信じていいのかと疑う暇もないまま、闇の中がぐにゃりと歪んだ。

風の死竜を、ここに置いていって良いのか。その思いはよぎったものの、そもそも合流をするはずのなかった相手なので、燕雨は迅速に歪んだ空間に飛び込んだのだった。

燕雨より強大である吸血鬼が不覚をとるのは、相手が限られている。あの吸血鬼は身内に酷く甘いために、燕雨の妹に関する者なら傷付けられることは有り得る。

燕雨も生身で手負いだろう痛い窮状だが、吸血鬼はどうなのだろう。風の死竜は吸血鬼の体を使っていると言っていたので、幽鬼の状態で怪我をして人世に帰って大丈夫なのか。

「何でさざなみの猫羽は、敵になるんだ……」

少し前も妹の姿で、橘桃花らしき相手が、吸血鬼を連れていった。その時には連れ戻すことができたのだが、今回はどうなることだろうか。闇の中で必死に吸血鬼との力の繋がりを手繰り、燕雨は誰より早く駆け付けたはずだった。

「——あら。ちゃんと従者をするのね、感心」

着いた先では、地面に倒れる吸血鬼の横に、黒いポニーテールの女がしゃがみこんでいた。

姿形だけなら「凧」だ。燕雨の養母の母で、娘に体を譲ってさざなみの天使となった妖狐。

しかし黒い髪と黒い左目、そして紅く光る右の目を持つ知らない姿。今かけられた声もかつて燕雨に天龍を教えた橘桃花と同じで、凧の姿でありながら中身は桃花に聴こえた。

それでも燕雨は、まず主の状況を確認する。

「シアに何をしたんだ、あんた達は」

凧の後ろには汐ノ香の人形がいた。燕雨が先日会った時には黒い髪だった人形が、紅い髪と青の眼になっていて、どちらも不審だ。

吸血鬼は遺跡周囲の広場にいたはずが、森になっている場。燕雨は故障した五感で探る。移動したのか、誰かの「力」の内にいるのか、先程「シオン」が言っていた猫羽もいない。

黒い髪の凧が立ち上がると、背後の人形をかばうように燕雨にまっすぐ対峙した。

「感謝してよね？　黒幕に連れていかれそうだったから、私達が止めてあげたの」

燕雨は最初に、仰向けに横たわる吸血鬼に駆け寄って膝をついた。そこに黒い髪の風の手が当てられた。頭上から溢れた光が燕雨を包むと、捨てずに持っていた左腕が繋がれていた。風は本来回復などの補助魔法を得意としたときくが、その力は失っていない黒の姿。

燕雨は吸血鬼の呼吸を手で確かめながら、背中越しに黒い髪の風を見て問うしかない。「あんたは橘桃花と一緒にいる……月夜？」

さざなみ達は自ら自身の情報を明かさない。流れる長い黒髪に夜を思った燕雨は、遺跡を夜にしたのがこの相手、という直観があった。橘桃花の実母であるのだから、その「力」を預かった後、黒く染まっても不思議の無い風。

くす、と黒い髪の風が微笑む。養母に体を譲ったために、そもそも養母と同じ顔である風の左頬に、狼のような黒い紋様が浮かんだ。

燕雨は次に、後ろの人形に向かって尋ねる。「あんたがラクトを恨んでる誰かで——俺のことは、竜の墓場で助けてくれた奴だろ？」
紅い髪の人形は何も応えず、顔も変えずに燕雨の視線にだけ目を合わせている。「あんたのこと、知らない悪魔が心配してた。あんたもそれは、解ってるみたいなのに……ここにいることの方が、あんたには大事？」

おそらくその人形の髪を染めた紅い誰かは、燕雨が下手に炎獄にいくと帰れなくなる、と追い返した者。倒れている吸血鬼は息をしていないが、外傷もなかった。ここにいる二人に傷付けられたのではない。

それでもさざなみの者達は己を明かせない。直観で探る内情にも限界があり、何故紅い誰かと黒髪の風が月夜の力を預かって一緒にいるのか、これ以上は推し測れない。

あつてはならないから、排除された災い。地獄の底に追放されたさざなみの者は、ない方がよい存在をヒトに知られることこそ禁忌。

紅い誰かは「忘却」と一緒に人形にいますが、燕雨の記憶を完全に消そうとはしない。燕雨の周囲にいる身内の誰かとそっくりな気配、そこまでは判るのだが、誰であるのか気付きだけが忘れさせられている。

「……俺、あんたの子供だった時がある？　よくわからないけど、そんな親心の気配だ」
「……——」

「あんたが桃花の一部の、紅花。あんた達は、二人共が魔竜……そうならないためにここにいるのか？」

口にしながら、どうしてそれが「災い」であるのか、燕雨自身も解らなくなっていた。自身が災いをもたらす、そんな心で去るような性質のものは、本当に災禍なのだろうか。

黒い髪の風が、桃花の声で再び口を開いた。「欲張りは程々にしておきなさい。貴方達の気が済むように記憶を残してあげているけど、こんな一時の幻には何の意味もないのよ」

何故か懐かしく感じてしまう涼しげな声。そういえば橘桃花は妹よりも女らしく、その違和感で妹ではないと昔は気付いた。

「貴男はとっくに気付いてるのでしょうか？ 桃花はそもそも存在しない反則で、汐ノ香が世にいないのは、封じられるべき禍なのだと」

「――」

胸の奥で、目を塞いでいた欠片が繋がる。治療された左腕が冷たくなった。元のように動いてくれるが、自分の手でないような感覚。

「シオンの羽は、魔竜の尻を止めて長く共にあったの。それが汐ノ香に渡された。じゃあ、誰がまず尻にシオンの羽を憑けたと思う？」

先刻のつい一瞬に、シオンは自身の歴史を口走った。そして親友には、北の遺跡にいた風竜の娘は、魔竜に故郷を滅茶苦茶にされて、故郷に行くと言って遺跡を出たとも聞いた。シオンの翼を持つ護衛と一緒に。

「忘却」を取り込める埒外の竜人、誰かが燕雨にそう言った。風で在る時の竜の娘を。

十 急 十

魔竜も竜宮も、自分とは何の関係もない。天の番人をする吸血鬼はそう思っていたが、竜の墓場という黄泉領域の番人が吸血鬼と瓜二つで、月の徴を持つ者同士ということ。その話からこの炎獄行きは決まったといっている。

何故か再び、吸血鬼は夢の中にいた。先程「忘却」が見せたものとは違い、浅い眠りに吸血鬼を惹き込む、ある罠と一緒に纏わりついた。

——フウカを竜宮に帰すよ。魔竜を止めよう。オレが預かってる『シオンの翼』は、どんな化け物でも一人は止められる音の羽だから。

その声は自身だった。差し出す手も己の心。

故郷が炎上して家族の安否もわからずに、気落ちして臥せっていた娘が起き上がった。——でも、フェズ……その翼は、フェズの……。

肩までで切り揃えられた、真直ぐの白雪の髪。人間には存在しない深い青の目の娘。——大丈夫、使うのは羽だけ。確かにオレは、この翼がないと月の竜の体を動かせないけど……フウカはオレよりこの羽を使えるよね？

遺跡に閉じ込められた娘を、出入りできるようにした護衛であり、遺跡の鍵の後継者。それは墓場の番人となるため竜の体を現世に置いて黄泉に行った幽鬼の、残る骸を動かす「シオンの翼」だった。遺跡を守ってくれ、と青女が遺した、機械の人形と抜け殻の少年。

そりゃ、墓場の番人とそっくりなわけだ、と。自身と同じだとわかる相手が、シオンの翼を最初に憑けた番人の骸と知って納得する。「これは……じゃあ、汐ノ香の夢……？」

この吸血鬼が好んだ数少ない趣味。その辺の猫と惰眠を貪る時のような、薄い暗闇にいた。勝手に流れる夢の続き。重みだけを感じる唐突な猫から、夢の音色が静かに染みわたっていく。

故郷を荒らす魔竜を止めるために、風竜の娘は安全な遺跡を出す決意をした。その胸には絶え間ない悪寒が渦巻いていたのに。

——本当に、魔竜を……止められるの……？

当時既に、故郷は魔竜の縁者に閉鎖されていた。その前にほとんどの竜人も逃げ出している。

竜宮を一度広範囲で炎上させた後からは、魔竜と呼ばれる禍の少女は、討伐に来る者を返り討ちにしてさまようだけだった。何処かに向かって魔竜が竜宮を出てすぐ、竜宮たる大陸そのものも封印が行われている。最も力の強まる竜宮に帰れなくなった魔竜は、隣の風の大陸を一人ぼっちでふらついていた。

魔竜を見つけた風竜の娘と護衛の少年は、本当にこれが竜宮を焼いた魔物であるのかと、戦いを仕掛けることをためらってしまう。少女の額には第三の目のような青黒い紋様と、右目は紅い魔性に染まって、誰もが敵にしか見えなくなっていたのに。

「うわ……見事に、橘風じゃん、あれ」

こんな所で縁があったなどとは、吸血鬼は夢にも思わなかった。魔竜を嫁にしたという橘診療所の院長は知り合いなのだが、守護者となった雪の天使と共に診療所の受付の娘と関わったり、天使と離れた理由である死傷を負った時に、治療を受けたりしたくらいだ。人間界に行く際には泊まらせてもらうことはあるが、他には逆に何の接点もない。「接点はない……はずなんだけど……」

そう思うと、何故か胸が締め付けられる。胸の上に大き目の猫が、丸くなって寝ているような重み。時々寝ぼけて爪を立てるように。

「そんな甘い心で関わったから……だから『翼』は、引き裂かれたんだろうに……」

風竜の娘と護衛の少年より幼げな魔竜を、二人は攻撃できなかった。声をかけて保護をしようとしたのだが、関わる者は全て壊してきた魔竜の激しい抵抗が始まった。

暴走する哀れな魔竜を二人は止めたかった。作戦自体は初めの通り、シオンの翼から沢山むしった羽に、風竜の娘が「力」を載せる。

娘は風に乗せる歌が聴こえる全てに、己の言霊を届けて従わせられる異端の竜人だった。全ての相手に効くわけではないが、娘よりも気の弱い敵なら屈服させられる。

——もう大丈夫。私達は、貴女を傷付けない。

羽まみれの中で動きを止められた魔竜は、風竜の娘に抱かれて大人しくなった。それが悲劇の始まりであるとは、誰も知らずに。

常に狙われて疲れ果てていた魔竜を、娘達は付近の山小屋に運んだ。世界樹に行くの、とだけ言って眠った少女は、ただ幼かった。

魔竜を鎮める程の力を使った、風竜の娘も消耗していた。娘と少女を同じ寝台で休ませ、護衛の少年は扉の外で辺りを見張っていた。その夜すぐに追手は現れていた。

——魔竜を渡せ、って……あのコはただの、ちょっと暴走した子供だけじゃん！

燃え上がった竜宮を知らない護衛の少年は、追手から娘と少女を守ろうとした。少年自身には使い慣れない月の力しかなく、追手から気を奪って無力化しようとした少年の異端さで「魔竜の仲間」とみなされてしまう。

追手は複数いたので、少年は防ぎ切れずに山小屋の扉が乱暴に開けられた。無理をして起き上がった風竜の娘は、魔竜をかばって、普通の剣で体を貫かれて倒れた。それを見た魔竜の右目が再び紅く染まった。

——わたしの……せい……。

山小屋が吹き飛んだ。追手は全て、魔竜の少女が殺した。ぼろぼろに負傷した少年と、もう呼吸をしていない風竜の娘が残った。

倒れる風竜の娘にすがって少女が泣いた。まだ死んではいない体が温かく、護衛の少年は心を決める。少年を生かしているシオンの翼で、魔竜を卵に封じて追手から守り、風竜の娘を何とか少年の力を差し出して助ける、と。

風竜の娘が目覚めた時には、翼のない少年が倒れている姿と、隣には卵があった。月の竜の抜け殻をシオンの翼で動かしていた少年は、翼のほとんどで卵を守り、風竜の娘に残りの羽を渡して息絶えていた。

風竜の娘は、少年の抜け殻と卵を抱えて、風の大陸に移住した世界樹に助けを求めようとした。途中で現れた追手達を、目覚めてはいけなかった「力」で全て消し去って。

——お願い……私はどうなってもいいの……。

あまりにその「力」が危険なために、世界樹の現身である妖狐が、風竜の娘と魔竜の卵と、少年の骸を保護した。娘達がどうなったのかは、夢が終わってしまって解らなかった。

「ここで終わってる……それが、答だね」

おそらく風竜の娘は、少年に少しでも羽を返そうとした。それでも少年は起きなかった。周囲の熱を取り込む月の竜である少年の骸は、自然の気がある環境なら辛うじて維持される。助けられそうでも永遠に手の届かない抜け殻。風竜の娘はどれだけ絶望したことだろう。

そもそもきっと、少年こそがシオンの心。女の子らしき「紫音」も存在しているのは、深く関わった魔竜や風竜の娘の素因を、沢山の羽が取り込んでだろう。特に風竜の娘の「力」で、歌を詠唱とする制御力は橘凧にも確かあった。

これが吸血鬼と雪の天使の縁だったとして、それは果たして、前世の類と言えるだろうか。

「汐ノ香に凧の翼を渡したさざなみのボスは、そのつもりのはずかな……汐ノ香がフウカの生まれ変わりで、同じ力を使える、って」

魔竜の凧を欲しがったらしいことといい、炎獄ではとにかく強い「力」が必要らしい。

ひとまず吸血鬼は起き上がった。幻の野良猫がまだ引っ付いている気がしたが、名残惜しいが振り払う。

「でも、猫羽ちゃんにはあっさり、汐ノ香を連れていかせた。その意味では、猫羽ちゃんこそ何者？ ってとこか……何でそんなに、炎獄なんかで自由に動き回れるんだろ？」

どこまでもぼんやりとした暗い空間。夢幻で良いから謎の猫との眠りに帰りたくなる。
「.....フウカは確かに、汐ノ香っぱいけど」

今の吸血鬼自身は、果たしてあの少年——シオンの翼と同じだろうか。

吸血鬼が守ろうとしてきた前身、天の子供はそうだと思うが、ここにいるのは天の子供——要するに番人をする存在を守るために、宝の珠が造った人格でしかない。雪の天使が守ってきた「翼^{よくる}桶」が燕雨に殺され、「シア」になった時にシオンの翼の心は眠りについた。そのはずなのだ。

「シア君の怨念に過ぎなかったし、オレ.....『つばさ』は違ったし、汐ノ香.....フウカが探すのは、やっぱり燕雨かもしれないね.....」

一度殺された時に、吸血鬼の翼は半分近く燕雨に遷った。天の子供の心はそちらにあり、だからシオンも燕雨を慕ったと欠片が繋がる。

今の吸血鬼のことを、シオンは「水月」と呼んだ。水面に映った幻の月、そんな感覚。
「.....じゃあ、オレが、ここから出る必要はそもそもなかった？」

変化のなくなった薄い暗がり。出ることはできるが、燕雨を置いて帰るのは何かが違う。

「天の番人は、やった方がいいけど.....別にすぐに、誰かが困るわけでもないし」

自分は汐ノ香が必要とした者ではないこと。薄々あった予感だった。同じ体を使う怨念に過ぎない者だとわかっていたのに、汐ノ香に会いたいと願う心はどうして残っていたのか。

「汐ノ香の.....元はシオンの羽を手放したら、汐ノ香への心も消えるってことか、早い話」

ここにいるのは、天の番人を継ぐだけの者。それで何が悪いのだろう。汐ノ香を戻したい——シオンの羽を手がかりにするなら、この胸にいつまでも納めていては不可能なのだ。

手放したくないと思う心こそ、「シオン」の羽自体が持つ未練。きっとそうした呪縛から解放された何かが、幻だけの悪魔の「水月」。

「いつまでも会いたい誰かを探す、魔物.....オレもラクトに一ちゃんも、他の奴らも.....」

そう言えば、師は何処にいったのだろうか。人世に帰れ、と言われた。何かを渡すように頼まれた気がする。そうして姿のない猫達と眠るようなここにいた吸血鬼は、炎獄の北の島から何処に飛ばされたのだろう。

「燕雨のせいかな.....アイツに振り回されてるオレは、シオンの心？ それともオレ？」

わかりきっていた事へのぼやき。汐ノ香が消え、この体を守るために目覚めたばかりの吸血鬼には、猫が可愛い、その程度の好み以外に余分な感情は無かったというのに。

天の宝の珠を守るために、封印の鍵の役をやるなどと、相方は突然不遜な申し出をしてきた。その任命は相方を、己の一部にできるほどの、心からの信頼がいる。

汐ノ香は吸血鬼をその相手にしてくれたこと、それがどれ程得難い情状だったか、気が遠くなってきた。造られた吸血鬼には無理な話で、そんなに誰かを必要とできない。猫と天使、それらがたまにあれば十分なのだ。

「燕雨がやってきていちいち煩いのは、まあ、楽しいんだけどさ」

天の番人をする吸血鬼は、基本引きこもり。わざわざ訪ねて来る者がまずいない。けれど楽しいかどうかは、番人には必要のない心だ。天が平穏で、それで吸血鬼の周囲が憂いなく暮らせるなら良く、その手段も選ばなかった。

「.....でも燕雨をわざわざ助けたのも、オレとラクトに一ちゃんだっけ」

それはシオン——汐ノ香の羽の心だろうか。死にかけていた師にとどめになるとわかっていながら、あの時には燕雨を助けさせた。

あのバカ、今どこにいるのかな。その心配は、本当に自然に浮かんだ、この自身の心だった。

＊

幽鬼という思念状態であるはずの吸血鬼が、意識を失くして、燕雨の腕の中で倒れ続けていること。魄を離れて魂^{カラダ}が何処かにいった、と、黒い髪の風が隣にしゃがんで説明をした。

「多分、ミサキと一緒にね。このコが会った烙人は、予定とは違った、ニセの白火だから」「ニセの……白火？」

「死者に簡単に逢えたら苦労しない。わたしもずっと探しているのに、死者とはいる層が違うみたいなの。このコは元が死者だから、魔を捨てたら会えるかもしれないけど、私やフューシャは、厳密には死ねないから」

紅い髪の人形を見て言う。幻じみた笑みで。

「楡猫羽が、漣汐ノ香を巻き込み、夢の扉を開いた結果よ。眠りについた猫羽はさざなみの夢を広げることを望んで、炎と風の王子がそれに協力した。貴方達は夢の外側にいたのに、夢の存在である風竜や烙斗に出会った」

「夢の風竜や……烙斗？」

黒い髪の風が言う「烙斗」は、風の死竜が烙人を呼ぶニュアンスに近い。燕雨が知った烙人そのものではない、「ニセ」の何か。

「猫羽が眠りについた、って……ここはまだ、猫羽が眠ったままってことなのか？」

燕雨が心配していた妹は、その事件で燕雨の親友を解き放って目を覚ましている。もう終わったはずの悪夢が、炎獄では続いている。

「貴方達の世界に帰るのは簡単で、炎獄から出ればいいだけ。でもこのコは、望んだのね……シオンの羽を手放してでも、汐ノ香の夢に触れて、囚われてしまうことを」

そもそも燕雨と吸血鬼が探しに来た天使。その天使の夢を、僅かでも具現できるのは、天使と縁があった「ミサキ」だと付け加えた。

「烙斗とミサキはセットで動いている。烙斗はこのコに言ったはずよ。汐ノ香のために、天使を殺しに行くから、汐ノ香の羽を貸せと」

その話はおそらく、黒い髪の風が紅い髪の人形から聞いた様子だった。紅い髪の人形は烙斗と話した感覚を何度も思い浮かべており、黒い髪の風にはその実感が何もないのだ。

なので燕雨は、紅い髪の人形の方を見て、まっすぐに大事な問いを伝える。

「あんたはラクトと話したんだろ。烙斗かもだけど、ソイツは、あんたが恨む相手？」

「……」

「あんたが恨むラクトにつながってる。でも、ラクトそのものじゃなくて……なら、天使を殺しに行くって、いったい誰のことなんだ？」

尋ねる相手が目前にあれば、訊くだけでも燕雨の故障した五感には、相手の中によぎる答がうっすら伝わる。

吸血鬼に会ったのは、烙人も制御ができる氷竜。それはまだ現世に在り、死んではない力。燕雨も知っている者が手放し続け、主^{あるじ}不明で宙ぶらりんなのだ。

その氷竜が烙人を映して、何らかの天使を殺しにいく。吸血鬼から汐ノ香の羽を借りて、その影響で吸血鬼はここで倒れている。

「ラクトはそもそも……誰かを殺すなんて、簡単に言う奴じゃなかっただろ」

かつて多くの者を殺してきた燕雨よりも、余程甘いところのあった男。氷竜自体にも、誰かが制御しなければ自ら動くほどの自我はなかったはずだ。だから主不明のままで。「でも、そうか……氷竜を預かってたのは、ゼロ。この遺跡の力はゼロの半身、春日零那^{かすがれな}に行っちゃって、そう言えば墓場で聞いた」

本来氷竜は、燕雨には義理の伯母にあたる春日零那と、その魂のゼロが預かっている力。

本当の主は零那の弟で、龍斗^{りゅうと}という。烙印のニュアンスがその系譜であることを感じ取る。

「ゼロと零那なら、ここに氷竜を放せるのか。でも、何のために？」

くすり、と黒い髪の風が、嬉しそうにする。紅い髪の人形が哀しげな青い眼で口を開いた。

「……烙印は、自分が何か変だとは思ってる。でも、自分のことを、烙人だと思ってるわ」

「そこが本当、困ったところ。まあ、氷竜の白い心では、自分からは動けないしね」

ついでに言えば、と黒い髪の風が笑った。

「このコも氷竜を、烙人だと感じてた。でも、実際の烙人——赤火の器になれるのは、このコか貴男くらいなんだけど」

「……じゃあ、あんたの狙いは、俺かシアがラクトになる——烙人を見つけること？」

ふ、と黒い髪の風が、微笑みながら黙った。現在吸血鬼が眠りに落とされていることも、それ自体が赤火とやらを誘い^{いざな}そうだと。

「でも、ラクト……赤って感じじゃないけど」

燕雨にとっては、竜牙烙人は蒼い目をして、目端のきく養父がいうには青の本質の主だ。ここにいる二人は必ずしも真実を語って——思っていない。吸血鬼を他のさざなみ達から守るためにここにいる、それも本当に思えた。

何が狙いか、二人は何者か、突き詰めてもあまり意味はないのだろう。それがさざなみという、刹那の天使達の在り方だから。

「シアを起こすにはどうすればいい？ もう炎獄から出た方がいいってことだろ、俺達」

答が返る成算はないが、ヒントだけでも。そんな思いで尋ねてみると、ずっと横で身をかがめていた黒い髪の風が燕雨を見つめた。

「このコを連れて、風竜を探しなさい。このコの体を、風竜が使ってるんでしょう。体に戻したところで、起きるかはわからないけど、連れて帰るのは帰りやすくなるわ」

つまりは眠る吸血鬼を担いで、遺跡に再び入れということ。どうしてそうも簡単に答を教えてくれるのか、この時の燕雨には不審に思えなかった。紅い髪の人形が溜め息をつき、黒い髪の風を複雑そうに見ていたことも。

眠る吸血鬼を背負った後に、落ち難いよう上腕から外した襟巻で括りつけてもらった。ずっと、橘桃花のように喋っていた黒い髪の風。頬に黒い狼の紋を浮かべ、月夜の徴を預かる状態。本来の風を知らない燕雨には、あまり違和感を持てないでいた。

遺跡の迷宮を再び歩く。夜ではないので、たまに幻の衛兵や罠が襲いかかってくる。「幽鬼状態なら無理に運ばなくても、何かでくっついてきてくれたら便利なのにな……」

何とか固定してもらったとはいえ、ヒトを背負いつつの立ち回りは大変だ。生身だろう燕雨の方は、腕が戻ったことは本当に助かる。幽鬼とやらを背負える生身は不思議だったが。

「どこにいったんだよ、アンタの魂。大方、汐ノ香の羽についていったんだろうけど」

もう還ってこないかもしれない。不思議とその心配は、燕雨にはなかった。その場合は中途半端に魄を残す吸血鬼ではない、と思う。

ただ逆に、この眠りが吸血鬼の自発の意志だけでない場合は、長居をすれば炎獄の一員になる可能性がある。燕雨もそうで、自分の意志でここにいる間は囚われないだけで。「ミサキも何がしたいんだか……烙人でない烙印とセットで、本当にいいのかな、あいつ」

目端がきくわりには細かいところは杜撰な、竜の子供のことを思う。烙人の縁者らしいが、炎獄に出入りできるというのは初めて知った。

烙人と共に燕雨を助けて、生かした子供。竜の墓場が本拠なので、召喚をされないと世には基本出られないと言った。燕雨の時は、悪魔召喚のできる妹がまぐれで喚んだのだ。「あの時の姿はほとんど猫だったような……シアが好きそうだよな、猫……ひょっとして、単にミサキが可愛くて、眠ってたりする？」

やたらと付近の猫に好かれて、猫まみれで眠るのが唯一の趣味である吸血鬼について思う。

烙印が天使殺しとやらを成功させたら、烙印もミサキも現れるだろうか。それとも汐ノ香の羽を吸血鬼に返して、会わずに消えるか。

「……！」

風の死竜を感じた。燕雨の感覚圏に入った。

月夜だった遺跡の夢から、風の死竜も出たのだろう。醒めない夢になる、と言っていたのに、痛くささくれた気色が燕雨に届く。

迷宮の隔壁の上縁に上がって、風の死竜の元に向かった。この遺跡は天井がないように見えているが、それも罠だと今ではわかる。

幽鬼の吸血鬼を背負ったままで、吸血鬼の体を使う風の死竜の所に降り立った。

「……君も夢から目覚めたのか。思ったより、甘やかしてくれないね、この遺跡の夢は」

燕雨の腕がくっついていることも目にして、風の死竜は安堵していた。容赦なさに文句を言いたかったが、風の死竜があまりに酷い顔なので声が止まった。

「……月夜に会ったのか、アンタ」

「そう。自分は元々天上の者だから、不要な記憶は天に還した。天に来られる翼もなしに、思い上がるな、とはっきり言われたよ」

迷宮の壁にもたれて風の死竜は座り込んでいる。動く気力がなくなったようで、燕雨は吸血鬼を背負って立ったままで見下ろす。

「……それは、黒くて長い髪の女？」

「そうだよ。顔は違って、生前には見たことのない一つ括りで、天の使徒になってたけど」

ああ。燕雨の中でこれまでの欠片が繋がる。

話すかどうかを、少し迷った。この相手は燕雨には敵とも言える。

それでも憐れだった。とても聡いのに大事なことは知らない鈍さ。

「……それ、その台詞。アンタはどう思う？」

「ははは。あのヒトの妹に、かつて同じ事を言われてフられてね。姉妹だな、と思ったよ」

その感想が駄目押しだった。燕雨はふう、と息をつく、と、また風の暴発を警戒しつつ、どう伝えるかを悩みながら口火をきった。

「じゃあ地上で生きろってことだろ。そいつはアンタが生きて、幸せになるのを願ってる」

「……え？」

「そいつが死んでから、アンタ、自暴自棄に生きたんだろ。俺もそいつ、さっき会った。アンタを地上に連れて帰れて言われたよ」

吸血鬼の体を使う風竜を探せ。間近だったので秘めた想いが燕雨には解った。

吸血鬼を体に戻せば、起きなくても連れて帰りやすくなる。黒い髪の風が言った真意。

「橘桃花の親の風に、黒い逆鱗が憑いてて。橘桃花——そいつを桃花にする月夜がいた。月夜がいないと、橘桃花は桃花になれない。アンタが会ったのも、黒い髪で天使の風」

「……？」

「風はアンタを知ってた。むしろ、だから、猫羽をさざなみに渡してまで、橘桃花の体を起こした。ラクトが殺しにいったのはそっちだろ。さざなみの天使として動く橘桃花を、ラクトは止めたい。アンタはラクトに自分の一部を貸して、烙印として動けるようにした。風はそういうアンタ達を、生かしたいんだ」

桃花はそもそも存在しない反則。親である風が、橘桃花の声で語った事は痛みだらけで。

「風が何で、月夜の記憶を持ってるのかは、俺にも判らない。でも風は、アンタのことを白火って呼んだ。アンタは夢の存在で、烙人の赤火の器になれるのはアンタじゃないと」

これを言うのが、最も躊躇われる。しかしこの炎獄の起点は、直視しなければいけない。

「アンタ。風竜の記憶を持った、ラクトだろ」

だから燕雨が言及した時、容赦がなかった。風の死竜と竜牙烙人の、重い繋がりについて。

「だからアンタのその姿は.....昔の烙人？」

白い髪で、白い目の男。

それが誰かを風は思い浮かべていた。もつれた地獄の底の淵で。

＊

体を王子に貸すという契約のはずの相方が、どうやら生身で炎獄にいること。相方の背で謎の眠りに囚われながら、魂と魄が分かれた自分自身にも吸血鬼は首を傾げる。

現状はまるで、吸血鬼を背負う相方の事を、すぐ上から見守っているような離脱状態だ。幽体はそもそも幽鬼の魄を指すと思うので、魂だけというのが本当によく解らない。

「アンタ。風竜の記憶を持った、ラクトだろ」

相方の断言に、なるほど、と吸血鬼も腕を組んだ。死神バイトの経験から言うと、死者にとって最も困るのは死者であることの再認。それは死から逃れる亡者には余命宣告なのだ。

——じゃあ、オレが会ったラクトに一ちゃんは、主不明の氷竜に風竜の逆鱗が憑いたってところか。烙人か龍斗か、凄い微妙なライン。

烙斗・ルペルクス。その名まで判ったわけではないが、本人は己を烙人だと思っているだろう。けれど烙人の本体は風竜と共にある。

黙り込む風の死竜に、相方は冷徹に続ける。

「風はアンタを、夢から現実の地上に出そうとしてる。反対する漣汐ノ香が邪魔だから、猫羽に汐ノ香を渡して、何か紅い奴に汐ノ香の人形を変えた。風が烙人——烙人の媒介の氷竜を、本当の主の龍斗に戻そうとしてたのは前からだけど……さっき、わかったんだ。風は風竜も、烙人というって知ってたって」

相方は出会った当初から故障した五感で、周囲の思惑や本意を常感じて、持っている情報が多過ぎるため説明が下手だった。その点は吸血鬼も人のことは言えなかったが。「風竜の記憶を起こしたのは、多分、風だ。何でここにいるかわからない、って言ってただろ、アンタ。烙人を完全な死者から、死者にはなり切ってない風の死竜にするためでもあるし……風竜そのものも、風は心配してる」

風の死竜の顔が陰しくなった。吸血鬼にもそれは見たことのない白い男で、烙人——師が霧の泉の精霊である己を捨ててでも、炎獄で再現した謎の姿であるのはわかった。

「……僕を、あのヒトが、心配してる？」

あくまで風の死竜の記憶で話すのは、死者である師は表に出られないからだ。師自体、風の死竜に共感している節もありそうだった。女難については師にも確かに色々あった。

「風。多分、二代目と三代目の魔竜ちゃんだ。僕の伝える竜珠が関わったから、知ってる」

相方が息を呑んで黙った。その辺りのことは知らない情報であるのだろう。
 「魔竜ちゃんの姉君が、僕に協力してくれていてね。『忘却』対策をしてくれたのも姉君で、月夜の残滓まで炎獄の夢に誘い込んでくれた。けれど、だからこそ姉君は言ったよ。彼女に僕の記憶はなく、あるのは烙人君への想い。彼女が欲しいなら、僕は烙人になれ、ってね」

それは烙人を生者に戻すためで、風の死竜への情けなどではない。心配という綺麗事を一笑する心の反吐だ。

「姉君は長く『忘却』と関わり、彼女の起源も『忘却』から情報を得ている。烙人君は、彼女が元々想っていた悪魔の一部分だそう。その悪魔には僕も会ったことがある。だから僕はそれを受け入れて、烙斗君と契約をした」

「じゃあ、アンタは……ラクトと月夜が縁を結べばいい、そう思ってる？」

「そういうことだね。彼女はもう長く、夜の女神の影をしている。橘桃花も君が言うように彼女が形を成したもののなら、烙人君が探す橘桃花はもう彼女と言える」

相方もそれはうっすら感じていたらしく、反論できなくなってしまう。それほど風の死竜は白い目の奥が鬼気迫っていた。

「それでいいんだよ、現実の形は。この夢が現になるのなら、烙人君は彼女と出会える。僕は夢の中にだけいる。地上に出るなんて、君が言うことは的外れで呆れるよ」

「——……」

「彼女は本当に想っていた相手と結ばれて、報われるべきヒトだった。僕は夢でいいから、会えたら良かった。あのヒトを心から笑顔にしてくれるなら——僕でなくて良いんだよ」

それなら風の死竜は、この夢幻の遺跡から出る気がない。体は彼らに返したとしても。

ああもう、と。

相方が言葉を探して必死の状態なので、歯がゆい、と思った瞬間、相方の背で幽鬼の吸血鬼は目を覚ましていた。

「……それ、さ。ラクトに一ちゃんまでそう誤解してるなら、こっちこそ呆れるけど」

相方と風の死竜が同時に驚く。よいしょ、と相方に繋がれた襟巻を外して、幽鬼の姿で吸血鬼は背中から降りる。

自分の体を借りて喋っている、師かつ風の死竜を、吸血鬼も微妙にやり切れない思いで見つめた。

「確かに橘桃花は、ほとんど月夜っばいよ。燕雨もどっちかわからなくて、悩んでるほど」

相方の声が止まった理由。師が探す相手は、月夜かもしれない、と相方も迷っている。
 ——じゃあ、ラクトはどっちを探してる？

吸血鬼は何も、細かい事情を知らない。まず橘桃花に、直接会ったこともないのだから。

「月夜と夜の女神は、それだけ混ざってハッキリ分けられないっぽいね。でもさ、そっちより多分、凧が言ったってことの方が重要だし」

吸血鬼の言う意味を、二人はまだわかっていない。反論が来ないのでフウ、と続ける。「橘凧は、ラクトに一ちゃんだけを戻すなら、風竜の記憶まで起こす必要はない。力だけを渡せばいいんだ。でも現状では風竜の方が、ラクトに一ちゃんより強い想いで顕れてる」

それはむしろ、烙人の霧で風竜を再現した現実。風竜はその霧を得て世に顕れている。

「猫羽ちゃんが凧と組んで、霧を渡してるね。霧の精霊って、今の持ち主は猫羽ちゃんだし」

「——そうなのか？」

相方がきょとん、と吸血鬼に振り返った。

「ここにも霧が立ち込めてるじゃん。お前これ、何だと思ってたのさ」

それはそうだけど、と不思議そうな相方。一度も姿を見せないながら、暗躍している妹には思うところもあるのだろう。

風の死竜は現在、心と記憶が風竜で、意志は師といったような雰囲気なのだ。風の死竜の心をあくまで映す白い師は、薄い霧の下でまだ納得がいかない顔をしていた。

「.....魔竜ちゃんが、何故、僕の心配を？」

月夜が形作る橘桃花の、凧は実母にあたる。だから月夜と縁があることはわかるが、実際風の死竜と凧に直接の面識はなさそうだった。

「オレもここで見た夢の話しかできないけど。冥夜って天女の、分身ばい銀色の月の狼が、極夜の竜の子供として生まれる夢を見たんだ。さっき凧の頬にあった黒い狼の紋——あれ、極夜で黒く染まった月夜の狼じゃない？」

銀色の狼が極夜の力で黒く染まった。その連想しか吸血鬼は持っていないが、青女以外にここで吸血鬼が見た「月」はそれだけだ。

風の死竜の声が止まった。白かった目にも何か激震が走ったようで、青く染まっていく。変化の力がその体を本来の風竜に変えていく。

「あ.....俺が墓場で会った、風のアイツだ」

相方もそう言うので、間違いないだろう。師よりもますます、風竜寄りになった相手が、吸血鬼の言った意味を必死で考えていた。

「冥夜の君——.....聞いたことがある、彼女の前代の極夜が、醜聞に染まった切欠.....」

情報通である風竜の権化。そして何より、愛する相手の逆鱗を思い出した風竜がいた。「じゃあ彼女は、確かにあの逆鱗は.....あの冥夜の逆鱗に、彼女の記憶.....魔竜はそれを.....それで魔竜は、僕を知っていた.....？」

どうやら風の死竜の思慮を借りるに、月夜のものだった逆鱗を、何故か凧が身に刻んで黒い姿になった。本当は青黒い逆鱗の核の黒。

夢で見た魔竜の風は、額に第三の目のような青黒い紋様を持っていた。頬に遷って狼のような核の紋様が目立っていたが、同じ黒色。

ここでようやく、相方が言葉を加えた。

「それで合ってると思う。あの風、喋ってたのはほとんど逆鱗の方。声が橘桃花だったし、風が存在を借りて月夜が話してたはずだ」

その意味も、風の死竜には届いていない。それこそ言いたかったように相方が続ける。「アンタの再現を望んだのは月夜だ。烙人の霧を使ってまでも。もう一度、言うけど……月夜はアンタに、幸せになってほしいんだ」

それは月夜の残滓の黒狼が、風竜を忘れてでも。それでも冥夜の逆鱗に託したかった心。

「だって——アンタが死竜でいられるのは、月夜から『青炎』を受け取ったからだろ？」

相方が、吸血鬼の知らない情報を出した。「青炎」、それは師も本質で持つ素因で、その共通点で師と風竜は契約できたのか、と悟る。

風の死竜が相方を見上げた。涙がないだけで慟哭する寸前のような顔付き。

「月夜の力のはずの『青炎』……周囲の熱や、魔力を取り込む鬼火の力を、夫だったアンタに分けたから。それは、『力』を分ける程心の通じた相手にしか、できない事だってきいた」

相方は何処でそんな話をきいたのだろう。何か悪魔の悪戯が関わる風体の話ではあり、風の死竜も覚えがあるようで目を見開いた。

「月夜の鬼火で、アンタの風は残り続けてる。ここからは霧の器で、地上で生きろ。月夜の願いは多分、それだと思うんだけど……」

それはどうして、今このタイミングで具現された願いなのか。

おそらく黒幕は猫羽で、誰にも振り返られずに捨て置かれていた心を、猫羽が拾って回っている。風の死竜と月夜が生前、どんな関係を築いていたのか吸血鬼は知らないのだが、月夜に世に残す心があるとすればこちらだろう、と吸血鬼も思った。

冥夜の君と呼ばれた、銀色の狼を宿す天女。本当は夜を映しながら、月光を持つ空の系譜。その記憶は「忘却」が預かった黒い狼の逆鱗に隠され、何処かで魔竜の元に渡ったのだと。

「……とりあえずは、一緒に地上に帰ろう。アンタはしばらく、シアの竜になればいい」

吸血鬼は昔から、様々な「力」を扱える。風竜が一つ増えるとなると消耗も激増するが、辛うじて血縁があるなら何とかなるだろう。相方も何一つ話してはいないのに、吸血鬼の状態を正確に把握している。

「シアに今、汐ノ香の羽がない分、アンタがシアを埋めてくれると助かるんだ。ラクトがアンタというっていうなら、尚更助かる」

これまで吸血鬼が眠りに囚われていたのは、その喪失が原因だと観えた。氷竜の方の師が持っていった天使の羽を、今取り返すことを相方は諦めている。

「汐ノ香の羽と月夜の逆鱗と、汐ノ香自身と橘桃花。何か、探すのが増えるばかりだけど」

汐ノ香だけを探しに炎獄に入った彼らには、想定外の事態が連続で広がっている。体勢を一度、立て直すべきだと相方は判断した。

この相方は荒事に関しては存外に怜悧で、感情に流されることがほとんどない。吸血鬼にもそれらは急ぐ事柄ではないので、地上に帰るという相方に賛成した。

「オレもそれでいいと思う。フウカのことは大分判ったし、汐ノ香は猫羽ちゃんが連れていった、ってきいたし」

え。相方が吸血鬼を、蒼い目で見つめた。

余計なことを言った。そう気付くのは半瞬後だ。

＊

そう何度も使えない大きな力である次元の移動で、地上に戻らず遺跡の外に出た。炎獄からは出ていない、と吸血鬼が不服気に言う。

「何も今後戦わない条件で、後一回の移動が限度だよ、これ。猫羽ちゃんが気になるのはわかるけどさ、オレは体がある方が弱くなるし、お前だってかなりの消耗状態なのに」

風の死竜が使っていた体に戻った吸血鬼は、燕雨と同じで生身になった。風の死竜が色々ショックを受けて動きたがらなかったのも、置いていくわけにもいかず、吸血鬼を戻した。

「でも遺跡にいたフェズが番人の抜け殻で、シオンの翼を生やしてフウカといたんだろ」

フウカのことが大分わかった、という話を燕雨はあれから問い詰めた。妹が気になる事も本当だが、汐ノ香の羽——シオンの翼関係でやっと得られた情報について、見逃せない部分がどうしてもあった。

「罅が魔竜で、それを止めたのがシオンの翼。俺もシオンからちらっと聞いたけど、その時シオンは猫羽が来たって言ってた。あんたを殺して、だからシオンが外に出られたって」

吸血鬼にとっては、師である烙人に渡したつもりの汐ノ香の羽。それなら妹と、氷竜の烙印の両方が羽に関わっている。

妹が使う体は桃花で、さざなみとして汐ノ香を巻き込んだなら、烙印が殺す天使とはやはり桃花だろう。

「猫羽——桃花が連れていった汐ノ香を奪う。それでラクトが桃花を殺すなんて、悪夢だ」

「それはオレも同感だけど。二人にはミサキがついてる可能性が高いから、見つけるのは無理だと思うんだけど」

烙印は現在無力だ、と吸血鬼にきいた。妹はどういう状態なのかわからないが、ミサキは特殊な力を持つ竜の子供だ。「力」を解析して介入することができて、炎獄内では風の翼という悪魔の媒介でおそらく移動が自由になる。

「烙印——氷竜を連れて帰れば、烙人にも何か力になるかもだし。猫羽も多分、そんな感じで行動してると思う。でもその猫羽は、俺達の現実にはいなかった猫羽で」

それなら烙印も、風竜も夢の存在のまま。地上に帰れば、露と消えてしまうのでは、と漠然と思った。いないはずの妹でなく、燕雨自身が動かなければ、燕雨の現実には風竜を連れて帰れないのだと。

「……夢を現実にすると言ってるね、お前」

「だって汐ノ香の羽が消えたまま、風竜まで消えてシアが眠りについたら困る」

ぐう。吸血鬼が随分と豊かになった表情で、複雑な顔で黙り込んだ。

「今のシアなら判るだろ？ 風竜とラクトの力の繋がりを辿って、居場所を追いたいんだ」

吸血鬼は現在、風竜も烙人も宿す身。今でしか追えない相手があった。互いにかなりの無理をしてでも。

ずっと不満げな吸血鬼だったが、しぶしぶ己とつながる力の気配を追い始めた。本来は燕雨より余程探知力の鋭い相手で、何を目的とすればいいか、現状のカラクリさえ認識をすれば、死神の勘が悪魔の素因と共に冴えわたる。

幸い探す対象は遠くに行っていなかった。炎獄の全く知らない異所まで追いかけるのは、今の体力では燕雨も吸血鬼も心許ない。

「ミサキと猫羽ちゃんなら遠くに行けても、ラクトに一ちゃんは無理だったか。そもそもこの地が多分、氷竜には一番相性がいいし」

そうして長い棍を持つ烙斗と、大きな鎌を振る妹の体——橘桃花がいる場所に着いた。そこは北の島の城に近い森の一画だった。

「あれは……猫羽、じゃない、黒い髪だな」

刃のない棍で防戦一方の烙斗を、鎌で牽制している娘。背に汐ノ香の羽を生やしている。吸血鬼が烙斗に渡したはずの天使の羽。

話し声に、聞き耳を立てる。ミサキの姿が見当たらないので、先に状況を窺いたかった。

烙斗は生前の烙人そのものの顔と、何故か人間界の学生服で、桃花も猫羽の制服だった。

「いい加減に、諦めたらどう？ 猫羽はもう、新しい世界に行った。黄昏の泡が終わっても夢が続いて、貴男達を世界に残すために」

それはとても冷たい声色。同時に弧を描く大鎌で斬りかかる桃花が、さざなみの天使の立場で無力な烙斗に引導を渡している。

「燕雨達と地上に行きなさい。ミサキが猫羽についた以上、貴男に他に打開策はない」

迫り合う二人を見て、状況がわかった。

黒い髪の風は、烙斗とミサキがセットだと燕雨に言ったが、烙斗に協力して武器も渡したはずのミサキは、途中で猫羽に力を貸した。そのため汐ノ香の羽が桃花に渡り、猫羽は桃花の体を置いて消えた。

そのミサキは吸血鬼と一緒に寝ていたらしく、汐ノ香の羽は実際には誰が奪い、何故ミサキも眠らせていたのだろう。羽を貸せ、と烙斗に頼まれた事しか吸血鬼は憶えていない。渡した記憶はなかったのだ。

烙斗はとても嫌そうな顔をして、制服姿の桃花に駄々をこねつつ長棍で払い返す。

「だから、オレに地上に出てほしかったら、サクラとお前も来いって言ってんだろ？」

それができないからここにいる、と桃花は何度も説明をしたようだった。主が不明でもまだ氷竜自体は生きているため、烙斗だけは、意志さえあれば人世に戻れる。人世に在れた風竜の逆鱗に助けられる、仮初めの烙斗で。

「そちらの夢から私が出れば、代わりにヒトである猫羽が消える。黄昏の泡はどちらにも行ける夢だけど、今この夢幻は燕雨達のもの。代償を払うのは彼らになる」

詳細は意味不明だが、桃花の言う話は判る。元々猫羽のいない世界なら桃花が出ても良いのだろうが、この燕雨の妹は今も元気なのだ。

「猫羽の中で、大人しくしてたらいいだろ。風竜の奴も、王子にも潜伏できるっつーし」

人の世に出るためには、何かの依り代に宿る——生け贄を必要とするさざなみ。サクラ、と烙斗が呼ぶ紅い誰かも、既に人世に存在する悪魔が依り代になれる。桃花も帰ればいい、そんな烙斗の訴えを桃花は斬って捨てる。

「霧の精霊がいない猫羽に、私が宿ればどうなると思う？　簡単に自我を侵蝕してしまう。そもそもこの体では、私の方が優位だから」

それも当たり前の話だった。まず猫羽の方が後からの居候で、橘桃花こそが体の主だ。「やがて紫音が生まれ出て、そちらに世界が引っ張られる。霧の精霊がまた苦しむのよ」

何も事情はわからないのに、燕雨の胸の奥が傷む。武器を交わしてでも桃花達を連れて帰りたい烙斗も、断る桃花の気持ちも伝わる。

隣で隠れる吸血鬼も苦そうな顔をしていた。この不毛な攻防を永遠に続けること自体が、ひょっとしたら烙斗には一番マシな状態かもしれない。望む道の選択ができない時には、選ばずいつまでも逡巡するのも一つ。燕雨は何故か、それを知っているような気がした。

「……ミサキはそれで、烙斗を置いてった？」

「多分ね。だって、桃花ちゃんと斬り合いができて楽しそうじゃん。ラクトに一ちゃん」

燕雨も判断しなければいけない。汐ノ香の羽をつける桃花や氷竜らしい烙斗を、どうするのかを。

あの桃花は誰だろう、と燕雨は想う。月夜か夜か空にもなる混沌か、紅い光か水の器。

紅い人形は別にて、水の器は燕雨の母の悪魔だから、消去法で混沌の者。烙斗にも風の死竜にも求められていたはずの、橘桃花。

桃花自身は、烙斗の本質をそこで思った。話すかどうかを悩んでいたか、突き放すためにも真実を伝えることを決意したようだった。

「……貴男は勘違いをしている。貴男は烙人というより、龍斗。烙人に一時、制御された氷竜で、烙人の記憶と心を知っているだけ」

烙斗が立ち止まって黙った。桃花も俯く。

「サクラを連れ戻したいのが、貴男の本音。でもサクラは私を、ここに独りにはしない」

サクラと呼ばれる紅い光。そちらも共に人世に戻れば、悪魔としてだけ存在していたサクラがおそらくヒトに戻る。その紅い光も「桃花」の一面。

燕雨に声をかけてきた謎の悪魔は、紅い光が烙人を恨んでいると言った。橘桃花——混沌の者を連れていってしまう烙人を。

「私は元々、陰府のものなの。黄泉が人世と混沌の間にある闇なら、陰府は炎獄側の闇」

吸血鬼と顔を見合わせる。死神バイトなどしていた吸血鬼も、初めてきいた事柄に見えた。

「氷竜が探すのはサクラで、烙人が探すのは天龍のわたし。もう私しか、あたしもわたしも映すことはできないでしょうけど……それでも、私は私のさだめから逃げることはできない」

吸血鬼がぼつりと、冥夜の君、と呟いた。何で今、と思った瞬間、脳裏に声が浮かぶ。

——今の『月夜』殿は、冥府の天女の器。

——冥夜って天女の、分身ばい月の狼。

混沌の者とは、冥夜の月か夜の水沼か、空の光を隠す器。その三面を持つのが橘桃花。

烙斗が本能的に相手を桃花と感じて、まだ踏み止まっているのも間違いではなかった。ミサキは逆に、誰が誰だかわからなくなった疑いがある。猫羽と新しい世界とやらに行くというのは、烙斗に場を丸投げにしたのだ。

燕雨もここで、何が適切な選択になるのか全くわからなかった。正しさという視点では、きっと桃花に軍配が上がると感じていても。

二人の動きが止まった隙に、烙斗と桃花の間に飛び込んだ。桃花は燕雨達にも気付いていたが、烙斗はぼかん、としている。

「……どっちも一緒に行こう。猫羽のことは、何かあったら俺が動くから」

桃花が目を見開いて口を引き結んだ。燕雨の方を、信じられない相手のように凝視する。

「サクラも出てくるなら助かるけど、あいつ、悪魔に守られてるから。ラクトは桃花だけで諦めてくれ。サクラはラクトを恨んだ方が、多分ここから消えずに済むんだ」

桃花も烙斗も押し黙った。吸血鬼も不思議そうな顔で目を丸くするが、否定はしない。燕雨に己の思考の経路は説明できなかったが。

桃花はわざわざ、ここで戦っていることが答。燕雨はそう感じていただけだった。

「シアに汐ノ香の羽を返してほしいし、風竜の奴とあんたは、ちゃんと話をしてほしい。とっくに死んだ『月夜』の気持ちがわかるのは、多分あんただけなんだろう」

そのためには全員が一度、何事もあやふやでしかない炎獄から出た方がいい。それだけの直観で燕雨は拙い手を差し出す。

その代償として心配されている事は、猫羽の危機がメインだ。その点に責任を持つ者が存在するなら、二人はもう迷わないでいい。

「……猫羽も多分、それを願った。だから、ここにあって、あんた達を置いていったんだ」

燕雨としては、ひたすら頭が痛い。けれど見て見ぬふりもできない。

今までとは違った何かの可能性が、目の前で生まれていること。たとえそれが禍の種類でも、現世に生きるただのヒトには、手の届く^{ところ}で何かを変えていくしかない。

烙人の本体ではない氷竜の烙斗と、烙人として話すことはできない風竜。汐ノ香の羽を憑ける人間であるが、常世^{ヨミ}の者だという桃花。最早誰が誰かもわかったものではない。

魔物とは、そういうものなのかもしれない。ふと思っていた。元の姿形をなくしても世に留まり、未練^{すく}を追いつけていくもの。

立ち竦^{すく}む桃花の手を、燕雨から掴んだ。

長い祈りの光が、木々の間から零れていた。

●結

close. G

炎獄ではっきりと形を持っていた時点で、夢から出て動き回っている亡者。そんなさざなみの理屈を、彼らは北の城でミサキにまず説明された。

複数人での次元移動で、吸血鬼が倒れた。炎獄に続く奈落がある北の城に帰りついて、そこで風竜を召喚した王子と共に現れたのが、灰桜の髪を持つ少年ミサキだった。

「みんな、お疲れ様だよー！ 風竜は一旦、王子が引き受けるから、シア君は氷竜の維持に集中してくれると嬉しいな！」

王子は吸血鬼の相方の妹と同じで、召喚術に長けている。その上に竜種の末裔でもある。

「いや、オマエ……オレのこと、ころす気？」

仔猫の姿でないミサキには、吸血鬼は甘い顔をする気になれない。風竜が散らばるのを阻止するだけでも消耗が予想できていたが、何の縁もない氷竜を抱えることは、水灰の吸血鬼には想定外に過ぎた。

「えーでも、悪いのは燕雨君だし。向こうで寝てるお母さん達は、『桃花水』との協働だけでも精一杯だろうし？」

猫羽の体であるはずの、橘桃花を連れて出たこと。猫羽が元気で炎獄と関わりのない世界で、その歪みは相方の養母の昏睡で顕れた。橘桃花の逆鱗を持つのが流^る惟という悪魔で、倒れたのを何故かミサキが連れてきたのだ。

お母さん「達」。ミサキがそう言うのは、橘桃花という存在の中には、母と月夜と紅い光の花、全てがごっちゃに混ざっているからだという。

更には汐ノ香の羽——シオンの翼が憑くため、魔として流惟が暴れることもなく、猫羽への被害はひとまず回避されたわけだった。

「でも多分、ネコハが謎天使化した世界線もあると思うな。流惟さんとネコハ、どっちにお母さん達が還るかは、誰がそもそも炎獄で橘桃花をしたとみなされたか、それだけだし」

ミサキを召喚したのは王子らしい。王子は風の珠を受け継ぐ子孫なので、風竜維持には大きく苦労はしない。吸血鬼は持ちうる限りの霊力を全て氷竜に奪われる状態になった。

そうして城の寝台で臥せっている吸血鬼に、相方が申し訳なさそうに看病をしている。

王子もミサキの維持に関しては、人間にはなけなしの魔力を全提供しており、この場にいる四人で最も余裕があるのは相方だった。

「ボクも謎天使ネコハの新しい世界、ついていきたかったのにここに来ちゃった。汐ノ香もそっちにいったはずだし、残念だなー」

あくまで呑気なミサキでも、言っている事は重い。そもそもさざなみの一員である風の翼を持つミサキなので、今後に彼らの命運をいくらでも狂わせる恐れがある相手。

相方は困った顔色で、ぽんぽん、とミサキの頭を撫で叩く。ミサキは嬉しそうにする。

余裕のない彼らの様子を窺っていた王子が、やっと苦笑いをしながら口を開いていた。「とりあえず、ぼくの天使の依頼はこなせたようで良かったけど。その天使自体、ここにいる天使じゃないっていうのは複雑だね」

相方の妹に頼まれて風竜を召喚し、彼らと取引をした王子。それはこの世界の妹でなく、さざなみとして暗躍する検猫羽だったこと。王子も初めから不審には思っていたらしく、それでも大切な幼馴染だから、と頑張ったとのことだった。

「……シアはこの先、烙印を使えそうか？」

「むり。氷竜の灵力消費量、半端なさすぎ。黒の宝珠がなければとっくに霧散してる」

雪の天使が使っていた渦の水竜を預かった時には、黒の宝珠とほぼ属性が同じであり、ここまで消耗はしないで済んだ。氷は水と似てはいるが、熱の制御も必要とするために、力の消費量が少なくとも二倍の体感がある。

「オレは当分動けないから、お前が守ってよ」

「それはわかってるけど……困ったな？」

責任をとると言ったのは相方だ。吸血鬼も師を置き去りにすることは忍びなかったのに我慢するが、解決は相方に考えてもらう。

相方にとっては養母と主君が、一気に戦闘不能になった事態。王子もミサキも、できることがあれば言ってね、と口にするが、相方は難しい顔で唸り続ける。

この散々な状態はひとまず、相方の妹には黙っておくことになった。違う世界では炎獄のさざなみと化するような妹なので、あまり心配をかけないための箝口令だ。

北の小島は水気が強い。しばらくこの城で相方と籠るしか、吸血鬼にはできないだろう。天の番人をできない期間が痛い。しかしその使命は炎獄でも放置しかけた事柄であるため、わざわざ相方を責める気はなかった。

王子はしばらくミサキを具現し、北の城で滞在すると言った。風竜の今後を相談したいのが本音のようで、自国の宰相に片想い中の王子も、不憫な祖先が気になっているのだ。

「……みんな、ヒトの未練を追い過ぎ」

そもそもの発端は吸血鬼の宿業。さざなみとして炎獄に消えた雪の天使を、我が事でもないのに相方が探しにいこう、と言った。

吸血鬼のそうした目的は叶わないままで、背負うものだけが増えた。相方も問題ばかり抱え込んだ。彼らとは直接関係のないことを。

王子とミサキが相方の養母の方に行くと、悩んでいたことを相方が話し始めた。
「多分、氷竜はゼロに渡したら維持はできる。でもそれは元の状態に戻ることで、それだと烙印は夢に戻る。母さんも同じで、今度こそ桃花を抱えるために、眠りについてるんだ」

かつては助けられなかった相手。そんな意で相方は周囲の真情を感じ取っている。
「まあ、ラクトに一ちゃんの赤火の器はオレかお前だって、橘凧も言っていたみたいだし」
吸血鬼か相方がその存在に関わる時だけ、世に再現され得るもの。風竜も王子か吸血鬼が維持しなければいけないのだろう。何かの代償を必要とするのがさざなみの夢の具現。

わかりやすい変化があった。吸血鬼の灰色である目が、徐々に赤く染まっている。
「シオンもいないままだしね。オレ、何か違う奴に、これからなってくのかも」
「.....アンタと母さんが駆け落ちをしたら、今度は親父が泣く番かな」
相方の^たえは笑えなかった。吸血鬼が烙印に、相方の養母が橘桃花と化す可能性の話なのだ。
「うーん.....それなら、猫羽ちゃんの方が、オレはいい.....」
「どっちも駄目。王子もミサキをずっと維持するのは仔猫型でないと無理みたいだけど、母さんはとにかく、王子達に任せる。俺は、俺自身が氷竜を維持する方法を探すよ」

本来は竜種として、長い生をつないできた相方。そう言い出すことはわかっていたが、赤火とやらが相方を侵蝕した場合、もっと取り返しがつかない。吸血鬼はふと言い返していた。
「やめといた方がいいよ、それ。多分、今回、オレ達を炎獄に招いた奴の思うつぼだし」
何故かそんな直感がする。翼の悪魔として時々吸血鬼には、こうした胸の騒ぎがあった。
「だって、ラクトに一ちゃん、赤じゃないし」

相方もその違和感はあったようだ。すぐに反論はせずに、横たわる吸血鬼をじっと見つめる。
「ラクトに一ちゃんを維持してるのが、何か赤火って呼ばれてるのはわかった。オレにもお前にも適合する、謎の力らしきものだって」

相方が何か、心当たりを探して考え込んだ。沈黙になった場に突然、そのさざなみの夢は割り込んできた。
「シアの言う通りよ。赤火は抑えつけて」
え、と二人で扉の方を見る。やれやれ、と頭を抱える全身黒ずくめの医者と、その男に連れてきてもらったらしき相方の妹がいた。普段の妹とは違う、鋭い表情と声色で立って。
「流惟には冥夜の力を引き受けてもらった。猫羽には少しだけ体を借りる。猫羽本人には影響をしないように頑張るから、貴方達も、可能な限り猫羽のことは巻き込まないで」

相方と顔を見合わせてから、橘桃花だろう妹をもう一度見直して、何とか頷く。

吸血鬼の体の奥で、震える氷竜が動き出した。そこにいる橘桃花への想い。ミサキも後ほどに、「お母さん！」と、号泣で駆け付けてくる。

「赤火は、貴男——燕雨になれなかった火竜。貴男の親友にもう一度会うために、夢の外に出ようとしている貴男、燕雨」

だから相方に、赤火を宿す氷竜を遷してはいけない。吸血鬼の悪い予感が形を成す。

「お前は……誰、ってきいていいの？」

吸血鬼にも一応、「橘桃花」が、何やら凄くややこしい者であるのは薄々伝わってきた。送ってきた医者は扉の外で待っているの、妹は相方の隣に来て、寝台前の椅子に座る。「火と氷が熱の裏表であるように、あたしは無と有の狭間にあるもの。玄い水気——光を持たない夜か、光を全て呑み込んだ黒い水沼、どちらも映す月や、混沌の空ろとも言える」

そうしてあえて難しく返す相手。理解など求めている色の顔は、嘘をつく気はないが、必要以上に彼らに関わろうとはしていない。

「水と光の流れは流惟に渡した。本当なら、サクラに返すべきだった力——でも」

相方と橘桃花は以前にも面識があるらしい。動じていない相方を、横を向いて見つめる。

「流惟からは、貴男が。サクラからは、赤火の貴男が生まれる。流惟は、貴男と猫羽を、探し続けていたから……あたし達は、赤火の貴男を犠牲にしたの」

それはどちらか一人しか、人世に生まれることはできなかった。そんな懺悔の声で。

「……だから炎獄にいたサクラみたいな奴は、俺の親みみたいな心を持ってたのか」

水と光の流れ。どうやら相方はその力を、本質として生まれ出る者。親が違えば、力が変わる。そこから生まれる心も変わる。

そして赤火の方の母。「白夜」の人形を紅い髪にした竜は、世には出てこなかった。

お母さん、と部屋が一気に騒がしくなったので、まとめて扉の外の医者にヒトを連れて出してもらった。相方も養母の方に行かせた。

明かりを消して、静かで暗くなった寝台の中で。相方を外したからやっと言える、体内の氷竜への文句を口に出す。

「……赤火のアイツが、氷竜のに一ちゃんと、サクラね一ちゃんの子供になるはずだった。だから烙人に一ちゃんは、燕雨の赤火を担える」

氷竜の烙印に利用された。嫌でもわかる。

師に会いたい吸血鬼に付け込み、師の本体でない氷竜が、赤火と動く力を世で得るために。

「水門管理者……か……—」

師が持っていたという、さざなみの素因。

橘桃花は氷竜に油断するな、と忠告をした。相方は一度竜の墓場にいったことで、赤火の竜人が使うはずだった黄泉の戯^{たわむ}れ、黄昏の光と既に繋がっている、と。

「そんな超昔っぽい縁のこと、誰がわざわざ、さざなみとして起こしたのやら……」

本当はわかりかけていた事を、あえて口にせずに留めた。

氷竜も相方を、赤火にしたいわけではない。旧い意識を起こされた以上、望みを持つのは風の死竜と同じなだけで。

「どうしよ、フウカ。オレは……——」

とりあえずは、一旦、眠ることにした。次に関く自身の目が、何色であったとしても。

月埋み火 了

十オマケ十

これまでで一番、お母さんに近い！ と、さざなみの竜の子供が遅くまではしゃいだ。そのため王子が、風竜の願いで橘桃花と二人で話せた頃には、もう朝陽が間近だった。「大丈夫なのかい？ 梶猫羽としては普通に明日も、高校があるだろうに」
「……体力だけはあるから、猫羽は」

王子は王子であるままでも、風竜と非常に近い心性なので代わりに話す。
北の城の屋上に出てきた橘桃花が、下弦の月を見上げた。そして王子が何か言う前に、それを告げた。
「……姉様から、貴男への思いを預かってる」

橘桃花がミサキの母として話す場合には、「月夜」は彼女には姉になるらしい。風竜の夢は月夜一つで、月夜自身は失っている記憶。橘桃花が狭い頬に、青黒い逆鱗を浮かべた。
「母さんも貴男のこと、心配してた。だからあたしに、魔竜の逆鱗をようやく渡した」
「……そこに、あのヒトの記憶があった？」
「橘凧が生まれ持ったのは、本来青の逆鱗。極夜の渦を壊した時に、受け取ってる。月夜が持つわけにいなかった、黒い記憶を」

そこにはただ、愛おしげに、風竜の王子を見つめる黒髪の少女がいる。
けれど口からは裏腹に、冷たい現実が告げられる。
「姉様は……貴男を思い出すことを望まない」

それはとっくに、いつまでも風竜のことを知らぬ存ぜぬの月夜が、行動で示してきた事。
言葉でわざわざ同じ話を伝えるのは、それを言う少女がここで、酷く悲しい顔をしていることを直接見せるためだっただろう。

「これは、風竜の意志じゃない、ぼくの解釈だけど。言ってもいいかな？」
間に立つ王子も、苦しい顔で笑うしかない。王子として喋れる相性の良さで良かった、と、風竜に聞かせるためにも話を続ける。
「風竜に生きて幸せになってほしいあのヒトは、風竜のいない墓場を永遠に往く。記憶を持っていたら、耐えることができないんじゃないかな。そんなに長い、空ろな時間を」
「……………」

「そこまでしても、あのヒトは貴女を守る。貴女はそれをわかっていて。だからぼくに、伝えに来てくれた。風竜が納得するまでは、ぼくが見守るよ。ぼくは貴女が、そのことを話しに来てくれて、本当に嬉しい」

黒髪の少女が今にも泣き出しそうな顔で、穏やかな王子をまっすぐに見つめた。空ろな少女が、少女として話せるようになるには、月夜や水の器の心が必要であるために。

月夜を月夜として、この世に送り出せたら。

優しい風の竜と、共に生きてほしい。それを少女が望めば、今度は映された少女が消える。

「……あたしのせいなのに、貴男は」

その王子が維持をしている、風の死竜の内には更に霧の精霊がいる。少女が長く探して望む、誰ともわからない青白い残滓。

「生きるか、死ぬか。どちらかしかないのが、常人のさだめだから……どちらであっても、あのヒトはもう、忘れるしかない」

風竜が体を失う前なら、番人として墓場に残る道はあった。それでも普通は、「死んだら会える」が黄泉であるので、知り得なかった方法を今から取り返すことはできない。

でも、と王子は、その宿命に反して活路を探す、ある悪魔使いのこともついでに話す。「ぼくの天使は、風竜とその居候のためにも、あちこち駆け回ってるみたいだけど」

悪魔使いとは、「魔」を飼い馴らす者達だ。さざなみの在り方に限らず、人世の幸せとは誰かが代償を払うものが多い。

魔物は大きな執着で変わらぬ幸せを望み、なりふり構わず奪おうとするもの。それを使いこなすのが「悪」。

「与えられたもの、自分の意味を超える事を望むのは、そもそも魔物の道なんだろうね」

誰がそのツケを払う「聖」か、押し付け合うのは人世でもよくあることだ。

ただ流されている王子にとっては、星のように拙い光で。

「……今だけは、抱きしめさせて」

夜明けの束の間、たった一瞬だけの再会。

沈みかけていた月が、白く清らかな光に埋もれていった。

† Information †

ここまでご覧下さり本当に有り難うございます。

本作『インマヌエル-魔-』が、自作二次焚書の炎獄アレンジ第二弾となります。

第三弾が予告掌編を紙の本に掲載の『探偵に地獄はツキモノです』となる予定です。

▼下記で紙の本＋クロスフォリオパスワードを販売しています(多忙時は閉店)

1 ☒ラクマ (<https://fril.jp/shop/xsky>)

※クロスフォリオパスワードは郵送物に添付のみ

※スーパー還元や購入お礼がつく時があります

2 ☒BOOTH (<https://endsky.booth.pm/>)

※パスワードが購入時にすぐ表示されるためキャンセル不可の即時決済限定です

※クロスフォリオに置けない epub 形式の非公開旧作がダウンロード可能

自作総本家のエブリスタでは大体の作品の web 公開を維持していますが、他サイトでは作品数が多くて煩雑なため、旧作は非公開に戻すことが多くなっています。

☒ エブリスタ (<https://estar.jp/users/107742416>)

☒ クロスフォリオ (<https://xfolio.jp/portfolio/sky>)

☒ パブー (<https://puboo.jp/users/sky-lux>)

☒ 星空文庫 (<https://slib.net/a/25945/>)

☒ ノベラボ (<https://www.novelabo.com/author/4396>)

今後、紙の本をご購入いただいた方には、様々な非公開旧作の電子書籍もダウンロードできるようにする予定です。

クロスフォリオのパスワードページ内で PDF や、BOOTH での購入時に epub ダウンロードが可能となります。

新作や販売開店のお知らせなどは、X に載せてはすぐに消しています。

作品数が増え、どう活動を続けていくかずっと模索中です。ご来訪下さる方々に心からの感謝を。

2026.9.29 X@kazari_sou

月熄

著 者 pierrette***

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
